

## 第 16 回 京都大学人文科学研究所 TOKYO 漢籍 SEMINAR

### 講 師 紹 介

---

2021 年 3 月 15 日 (月)

オンライン

古松 崇志 (ふるまつ たかし) 京都大学人文科学研究所・准教授

1972 年、富山市に生まれ、横浜市で育つ。京都大学文学部（東洋史学専攻）卒業、同大学院文学研究科博士課程退学。博士（文学）。京都大学人文科学研究所助手、同助教、岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授を経て、2017 年より現職。専門は 10～13 世紀の多極化時代のユーラシア東方の歴史で、王朝でいえば北方の契丹（遼）・金、中国の宋などに当たり、おもに王朝間の関係史を研究しているほか、考古資料や石刻史料を活用した契丹史の研究にも関心を持っています。主著に北魏からモンゴル帝国までの北方王朝の歴史を概観した『草原の制覇』（岩波新書シリーズ中国の歴史 3）（岩波書店、2020 年）のほか、『金（女真）の歴史とユーラシア東方』（共編著、勉誠出版、2019 年）、『中国経済史』（共著、名古屋大学出版会、2013 年）があります。主催する共同研究班「前近代ユーラシア東方の戦争と外交」における研究成果の一端を紹介すべく、今回のセミナーを企画しました。

伊藤 一馬 (いとう かずま) 大阪大学大学院文学研究科・招へい研究員

1984 年、奈良県生まれ。大阪大学文学部（東洋史学）卒業、同大学院博士後期課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、大阪大学大学院文学研究科助教を経て現職。10～13 世紀のユーラシア東方情勢の中で、宋王朝がどのような統治体制・軍事体制を構築していたのかに関心を持っています。宋王朝と言うと、どうしても遊牧勢力に圧迫されて軍事的に弱体であったというイメージが強いと思いますが、そのようなイメージは近年見直しが進んでいます。文書や碑刻など様々な新資料の発見・公開も進んでおり、今後ますます軍事史研究は活発な分野になるでしょう。この 1 年はなかなか現地調査も困難でしたが、早く以前のように調査ができるようになればと思っています。

井黒 忍 (いぐろ しのぶ) 大谷大学文学部・准教授

1974 年、福井県に生まれる。京都大学文学部史学科（東洋史学専攻）卒業。同大学院文学研究科博士後期課程単位認定退学。2006 年に博士（文学）の学位を取得。学生時代から金・モンゴル時代の政治史、制度史に関心を持ってきました。2001 年の中国留学中に行った現地調査により、水資源の利用や管理、水の信仰などに関する大量の石碑が中国の村々に残されていることを知り、地域社会やそこでの人々の暮らしといった日常的な事柄にも関心を抱くことになりました。その成果を『分水と支配：金・モンゴル時代華北の水利と農業』（早稲田大学出版部、2013 年）にまとめました。これら「金」と「水」に加えて、現在は宗教と社会の関係にも関心が湧いてきています。どうも移り気で困りますが、これらを自身の研究の三つの柱したいと思います。

## 『三朝北盟会編』を読む——亡国の史書

古松 崇志

2021 年 3 月 15 日

### はじめに

京大人文研の共同研究班「前近代ユーラシア東方における戦争と外交」（2018 年度～）

ユーラシア東方史の基本構図：中国本土の中国王朝と中央ユーラシア東部の遊牧王朝の南北対峙、対立・共存・支配被支配・融合といった多様な関係性

12 世紀前半東北アジアのマンチュリアより勃興した金（女真）、契丹（遼）・北宋を滅ぼし、華北まで支配下に入れ、淮水をはさんで南宋と対峙

徐夢莘『三朝北盟会編』：北宋滅亡（靖康の変）を中心に前後 45 年ほどの宋・金関係を宋朝の人びとが記録した南宋時代の史書。ユーラシア東方の南北間の戦争・外交を実証的に解明する格好の文献史料

### 1. 徐夢莘と『三朝北盟会編』

○徐夢莘と『三朝北盟会編』にかんする先行研究：陳樂素 1934・1936、鄧広銘・劉浦江 1998 が重要

○徐夢莘の生涯

生卒年：靖康元年(1126)～開禧三年(1207) 伝記史料：楼鑰撰の墓誌銘（史料 1）、『宋史』列伝は墓誌銘をもとに編集（史料 2）

経歴：紹興二四年(1154)に進士及第、知湘陰県、広西路転司主管文字、湖北路安撫司参議官などを歴任、とくに目立った官歴・功績なし

○書名：もとの書名は『三朝北盟集編』

「三朝」＝北宋の徽宗・欽宗と南宋の高宗の三代皇帝の治世を指す

「北盟」＝金と結んだ盟約…盟約を結ぶに至る外交と盟約が破られた戦争の双方を指す

→和戦両様の宋金関係にかかわる歴史記録を集成＝「集編」

朝廷へ献上後、『三朝北盟会編』の名に改められる。南宋では『集編』と『会編』が並存

○対象とする時代と体裁

徽宗・政和七年(1117)～高宗・紹興三二年(1162)の 46 年にまたがる

年代順に文献を排列する編年体史書、合計 250 卷

＝①政宣上帙（徽宗政和・宣和年間(1117～1125)、25 卷）②靖康中帙（欽宗靖康年間(1126～1127)、75 卷）③炎興下帙（高宗建炎・紹興年間(1127～1162)、150 卷）（史料 3 下線③）

○目録分類

『四庫全書』では史部紀事本末類に分類（史料 4『四庫全書總目提要』）

紀事本末：一つの事件ごとに事柄の顛末をまとめて記す。紀伝体・編年体の欠点を補うための史書の体裁、南宋の袁枢『通鑑紀事本末』に始まる→『会編』は編年類に入れるべき＝余嘉錫の指摘（史料 5）

※京大人文研東方部所蔵の『会編』（鈔本と袁氏活字本あり）、『四庫全書』を踏襲して紀事本末に分類  
『中国古籍善本書目』では史部編年に分類

#### ○『三朝北盟会編』編纂の目的

徐夢莘幼少期の体験：建炎三年(1129)の金軍の江西侵攻（黄州—長江渡河→洪州（現在の南昌）→臨江軍→吉州）、史学とくに現代史たる宋朝の歴史への関心（史料1下線②③⑫⑬＝弟徐得之が撰した行状にもとづき、徐夢莘自身の語りを反映）

「詔敕・制誥・書疏・奏議・記傳・行實・碑誌・文集・雜著」（史料3下線②）や金とやり取りした書簡（皇帝間の国書含む）や遼金に関する史書「金国諸録」ふくむ多種多様な文献 200 種以上を収集、紹熙五年(1194)までに『会編』完成。大部の書だったため、「綱目」一冊を作成（史料1下線⑥）

官撰史書：実録＝『欽宗実録』（乾道四年(1168)成書）・『徽宗実録』（淳熙四年(1177)成書）、正史（国史）＝『四朝国史』（淳熙一三年(1186)、北宋神宗・哲宗・徽宗・欽宗四代皇帝の歴史を記す正史）（官撰史書については蔡崇榜 1991、南宋における史書編纂については燕永成 2007・蔡涵墨 2016 など参照）  
→これら官撰史書と李燾『續資治通鑑長編』・『四繫録』は載録せず＝すでに史館に献上（史料3下線⑤）

『会編』の編纂：正史などオフィシャルな史料から漏れた文献・記録を拾い上げることを意識。もとなる文献の原文をできるだけそのまま載録。さまざまな異聞のある同一の事柄について、文献を取捨選択して排列、誤った伝聞を正し、宋金関係の真実を記録に残し、姦臣や忠臣の事跡の善悪を後世に残そうとする試み（史料3下線④）

例：卷三の女真記事＝史愿『金人亡遼録』、洪皓『松漠記聞』、汪藻『裔夷謀夏録』などを、徐夢莘が適宜組み合わせまとめた文章（邱靖嘉 2019B）

編纂姿勢の背景：本当の歴史を伝える記録が抹殺されることへの危機意識（史料3下線①）

紹興年間の秦檜による言論弾圧（野史の編纂禁止を含む）（黄寛重 1993B）。『四朝国史』（編纂時には高宗存命）に代表される南宋の官撰史料、靖康の変にかかわる歴史の直筆を忌避

→元・袁桷「修遼金宋史搜訪遺書條例事状」が記す『四朝国史』の欠陥（史料6）

『会編』の史料価値：『高宗実録』編纂の材料として史館に献上され、さらに『会編』書目に列举された関連文献百種以上が献上される（史料1下線⑦⑨）

その後、『北盟集補』五十巻の編纂：欽宗・高宗朝の記録を増補（史料1下線⑪・陳振孫『直齋書録解題』卷五、雜史類）

## 2. 『三朝北盟会編』の流伝と研究

#### ○鈔本

『会編』は鈔本で流伝

大陸：明鈔本 14 種、清鈔本 17 種（『中国古籍善本総目』（史部、編年、274～5 頁））

台湾：国家図書館と中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館にあわせて 8 種の鈔本

日本：京大人文研、静嘉堂文庫にそれぞれ 1 種の鈔本

#### ○通行する版本

##### ①光緒四年（1878）袁祖安木活字本

広東で出版した木活字本（史料7）。清末民国期に流布、『会編』を普及させた功績あり。京大人文研所蔵のほか日本に数多くの所蔵。1960・70 年代には台湾の影印本（文海出版社、1962 年・1977 年）、これ

にもとづく排印本（大化書局、1979 年）

## ②光緒三四年（1908）許涵度刻本

四川布政使の任にあった許涵度（1851～1913、光緒三四年には陝西布政使に転任）が成都の粹英堂書肆の唐鴻学（1879?～1944）に依頼して出版した木版本。光緒三四年にはじまり宣統二年（1910）に完成。日本では東洋文庫・立命館大学に所蔵あり

許涵度序文：「外交史」の萌芽、列強との外交関係を研究するのに役立つ書物として評価。袁祖安の木活字本を誤りが多いものと断じ、これにかわる善本であることを標榜（史料 8）

傅增湘の評価：活字本を数え切れない誤りのある本として酷評、許涵度の四川刻本は校勘の行き届いた優れた本と称賛（史料 9）

許刻本のもととなる鈔本＝乾隆五二年（1787）の『四庫全書』覆校のさいの底本。非漢語語彙のほか、「夷狄」など北方民族を野蛮視するような記述・語句を徹底改竄。この鈔本は上海図書館所蔵、経緯については邱靖嘉による詳密な研究あり（邱靖嘉 2019A）

影印本（上海古籍出版社、1987 年）出版、宋史研究の大家鄧広銘の推奨。『会編』の通行本となる

## ○研究のはじまり

日本の「東洋史」、中国（民国期）の自国史としての「中国史」：近代的な歴史学研究のはじまり

1930 年代～：日本の「満蒙史」研究＝金宋関係史研究、開拓者として外山軍治が重要（外山 1964）  
中国では「東北」の歴史・地理研究。満洲事変～日中戦争背景に中国でナショナリズムが高揚する時代状況のなかで、本格的な宋史・遼金史の研究が開始：宋金関係史の重視、岳飛のような「民族英雄」の研究（研究史のまとめは黄寛重 2003・古松 2011 など）

→『会編』、こうした研究のための根本史料として注目される＝陳楽素による徐夢莘と『会編』の基礎研究（陳楽素 1934・1936）

陳楽素 1936 の内容：①撰者 ②本書の内容 ③伝本 ④原書書目 ⑤書目に名があって引用されていないもの ⑥全書引用史料索引 ⑦出所を明記していない引用史料 ⑧宣和乙巳奉使行程録校補 ⑨引用書雑考 ⑩『宋史』『金史』本紀と『会編』の異同

## ○『三朝北盟会編』の文献研究——近年の新展開

### 21 世紀以後の漢籍研究

①漢籍の影印出版：20 世紀初頭の『四部叢刊』『百衲本二十四史』にはじまる。1990 年代～中国で国家プロジェクトによる大型叢書の影印出版＝『四庫全書存目叢書』（齐鲁書社、1997 年）、『続修四庫全書』（上海古籍出版社、2002 年）など一連の四庫系列の大型叢書の出版。宋元版はじめ善本を原物そっくり再現する『中華再造善本』（北京図書館出版社～国家図書館出版社、2002～2017）

②漢籍の全文書影データの公開：2010 年代～台湾・中国・日本・アメリカなどの主要所蔵機関で公開進む。とくに台北の国家図書館、北京の中国国家図書館・北京大学図書館、日本の国立公文書館・宮内庁書陵部などの所蔵漢籍善本の全文書影公開、漢籍の文献学研究に画期もたらす

### 『会編』の鈔本研究

①季振宜旧蔵明鈔本（中国国家図書館所蔵。半葉 10 行×20 字。蔵書印などより明・何鈞→清・季振宜→蘇氏→張金吾→張承煥→汪士鐘→上海涵芬樓→北京図書館（国家図書館）という所蔵者の移り変わりが判明）：『中華再造善本』影印出版（2013 年）。民国期には上海涵芬樓に蔵され、張元済の跋あり（史料 10）。250 卷中 20 卷（卷 111～120・136～145）を欠くが、欠けた部分は上海図書館に所蔵されているこ

とが近年発見される（邱靖嘉 2019）

通行本の許涵度刻本との比較：宋代皇帝の諱（本名）を避けて「廟諱」「御名」と記し、宋本の体裁を残し（史料 10 参照）、文字内容も明らかにより正確、整理・点校のさいには明鈔本を底本とすべき（邱靖嘉 2019）

②その他の明鈔本：国家図書館のウェブサイト「中華古籍資源庫」で湖東精舍本、王氏鬱岡齋鈔本、10995 番など四種の明鈔本の全文書影閲覧可能

湖東精舍本：250 卷すべて残る。『四部叢刊』四編（中国書店、2016 年）影印出版

→季振宜旧蔵明鈔本と系統近い

③清鈔本：京大人文研所蔵、張金吾・傅增湘などの旧蔵。明鈔本に系統近い

中国での整理・点校、出版計画

### 3. 『三朝北盟会編』『政宣上帙』を読む

○『三朝北盟会編』の年ごとに占める巻数（表 1（陳樂素 1936）参照）

「政宣上帙」（25 卷）：徽宗朝の政和・宣和年間、10 年間で 25 卷（1 年平均 2.5 卷）

「靖康中帙」（75 卷）：欽宗朝の靖康元年・二年(1126・7)、徽宗が欽宗に譲位した宣和七年末からあわせてわずか 1 年半で 75 卷と突出した多さ＝宋の滅亡の顛末を詳述

「炎興下帙」（150 卷）：高宗朝の建炎・紹興年間、紹興一二年（1142、金宋講和成立）まで 16 年で 112 卷と分厚く（1 年平均 7 卷）、紹興一三(1143)～三〇年(1160)の 18 年間はわずか 12 巻ほど。金の海陵王が南侵した紹興三一年は 1 年で 24 巻と突出。記述の濃淡に差あり

→金宋間の戦争にかかわる記事が中心

○『三朝北盟会編』『政宣上帙』の内容紹介（主な記事の一覧は表 2 参照）

時代背景：金（女真）の勃興～契丹（遼）の滅亡（概説として古松他編 2019、古松 2020 参照）

＝11 世紀末、女真の一部族集団の<sup>アルチュカ</sup>按出虎 水完顔部が遼の東北辺境（現在の黒龍江省ハルビン市近郊）より勃興。1115 年にその族長阿骨打が遼に叛旗ひるがえし、大金国を建国。遼軍を数度にわたって破り、1117 年までに遼東（遼東京一帯）平定。その後、両国で和平交渉をおこなうも決裂、全面戦争となり、金軍は 1120 年に上京一帯、1122 年に中京一帯と遼の本拠地を攻略、同年末には燕京（現在の北京）を平定（翌年阿骨打死去）。1125 年、天祚帝捕縛、遼を滅ぼす

『会編』『政宣上帙』の内容：宋・金同盟成立と崩壊の経緯を詳述＝のちの北宋滅亡に至る趨勢を決定づけた時期に当たる

・政和七年(1117)七月、金の侵攻を受けた遼東半島より避難した漢人、宋の支配下の山東半島へ漂着。宋の朝廷、遼国内の動乱を把握、「燕雲」（燕京と雲中＝現在の山西省大同）の地を回復して真の中国統一を実現する好機とみなし、金へ使者を派遣して同盟もちかける

・宣和二年(1120)までに、宋と金は遼に対する挟撃と燕雲割譲に向けた具体的な協議を進める

・宋では、宦官で武将の童貫が作戦を主導、西北の対西夏・チベット戦線で百戦錬磨の「西兵」（陝西方面の軍団）を率いて遼の挟撃を計画。ところが、宣和三年(1121)に南方で起こった方臘の乱鎮定に童貫軍を派兵、いったん同盟計画は頓挫。乱を平定し、翌年に再び燕京地区へ兵を進めるが、天祚帝が逃亡して弱体化したはずの燕京の遼政権の軍に二度にわたり大敗

・宋がもたつく間に金は独力で西京（雲中）・燕京を攻め落とす。宋が挟撃に参加できなかったにもかか

わらず、金は当初の約束を守り、宣和四年(1122)に宋と盟約を締結、燕京一帯を宋に割譲(宋は燕京を燕山と改名)。ただし、東の平州一帯は含まず、西京一帯の割譲はいったん認めたものの実行されず。また遼と同額の歳幣(銀 20 万両・絹 30 万匹)、燕京の税収のうち百万貫を毎年宋から金へ送るという条件

・同年、平州に拠った張覺が金にたいし叛乱、北方へ遷されるはずだった燕京の旧遼官僚や富戸などが多く宋側の燕山へ逃亡。これを把握した金、宋が盟約に背いたとして激怒。金では阿骨打(太祖)が亡くなり、弟の呉乞買(太宗)の即位後、西京に拠った粘罕(宗翰)が、宣和七年(1125)によりやう天祚帝を捕えて遼を滅ぼしたうえで、後顧の憂いなく宋への南征を決意

・同年、東は幹離不(宗望)、西は粘罕と東西両路から金軍が宋領内へ侵攻。東で燕山を陥落させ、西で太原を包囲。十二月、恐れをなした徽宗が皇太子に譲位(=欽宗)。「政宣上帙」はここで終了)

→欽宗即位後は「靖康中帙」、以後いったん講和が成立するが、すぐに破綻し、最終的に都の開封が陥落、宋の滅亡に至る。「靖康中帙」ではこの一連の「靖康の変」の次第が膨大な文献にもとづき詳述される

○『会編』「政宣上帙」のはじまり:「国家の禍変、是れ自り始まる」

『会編』の記事、見出しのような短い記事があり、そのあとに一字下げで詳細な記述を載せるという形式。この部分、徐夢莘自身が諸書にもとづいて編集した場合(書名なし)と関連する典籍文献や文書を引用した場合あり(基本的にもととなる書名・文書名を明記)

冒頭「政和七年登州航海通好之初」(徐夢莘自序)の記事

政和七年秋七月四日庚寅、知登州の王師中が奏するには、「遼人で蘇州の漢人の高薬師と僧の即榮らが、船で海を進んで文登縣の海岸までやって来ました。」師中に詔を下し、「人を募ってともに偵察に行かせて報告せよ。」(『会編』巻一、政和七年秋七月四日;原文史料 11 下線①)

この記事について、一字下げの部分で徐夢莘自身が詳しい顛末を述べたあとのまとめ

その後、女真と友好関係を結び、兵を挙げてたがいに応じ、挟撃して遼を滅ぼすことを議論した。国家の禍はこれより始まった。(『会編』巻一、政和七年秋七月四日;原文史料 11 下線②)

遼東動乱の情報が伝えられ、宋と金の連携に向けた動きがはじまり、後の靖康の変という亡国の禍をもたらす淵源となっているという認識が示される

=先行する蔡條『北征紀實』(『通鑑長編紀事本末』巻一四二、金盟上、政和七年七月李燾原注所引)の見解をふまえる。李燾『続資治通鑑長編』(『通鑑長編紀事本末』同所参照)もこの事件の記事を金との盟約のはじまりに置く

前年八月、宋の朝廷、北辺からの報告で女真の叛乱による遼の軍事行動の情報を把握(『宋会要輯稿』兵二九之五、政和六年八月一日)。この年二月の段階では、表向きは従来どおり遼との盟約を堅持する方針に揺らぎなし(『宋会要輯稿』蕃夷二之三、政和七年二月二十七日)

→この七月の登州からの報告が宋の方針転換もたらす

背景:前年までに遼東京と遼東をおさえた阿骨打、この年正月に天輔と改元してあらためて皇帝即位を宣言。それまで遼の支配下にあった遼東の女真人(熟女真)や渤海人の集団を取り込み、より大きな女真連合体の王朝へ発展、一大勢力として浮上した段階。ここに及んで遼は叛乱平定を断念、金を交渉相手として認めざるを得なくなり講和へと乗り出す(※金・遼・宋が並び立つ可能性もあり得た)

=1117 年の金の遼東平定と阿骨打の第二次即位、ユーラシア東方の激動の予兆を告げるもの、ほぼ時をおかずに海を越えて宋の朝廷に伝播

○徐夢莘の叙述の特質

①宋側の対金交渉をめぐる拙劣な失策について、諸文献を引用・編集しながら包み隠さず克明に記して

## 批判

- ・宣和元年(1119)、遼金和平交渉の情報が朝廷に伝わり、使者の派遣をやめる（巻4）
- ・宣和三年、南方での方臘の乱勃発により挾撃が難しくなり、金使を半年も足止めにした挙げ句に、使者の派遣をとりやめる（巻5）
- ・宣和四年、ようやく挾撃のために燕京へ侵攻するも、孤立して弱体化しているはずの燕京の遼軍に大敗して退却（巻5～8）、結局金は宋の力をまったく借りず、燕京陥落（巻12）。宋の無力を目の当たりにした金は、燕京割譲の条件として、歳幣のほかに燕京の税収の一部の送付と燕京の富戸の連行など、次々と強硬な要求を突きつけ、宋はそれを飲まざるを得なくなる（巻12～15）
- ・宣和五年の盟約締結後まもなく、平州に拠って金に叛いた張覚と通じ、張覚が宋に「納土状」を提出して帰附を請願すると、張覚に授官。金は後に平州を攻め落とし、宋が賜った詔書をすべて押収（巻18）
- ・同年、逃れた張覚を匿い、金の要求を受けてその首を献ずる（巻18）。そのほか、燕京の職官の宋に逃亡してきたものを受け入れる

＝張覚の件での宋側の行動は、いずれも明らかに重大な盟約違反……先に宋皇帝から金皇帝へ宛てた誓書に、国境の侵犯と逃亡者の受け入れの禁止を明記（遼・宋間の澶淵の盟と同じ：古松 2007）

両国の国境近くの人戸は、たがいに侵してはならない。盗賊や逃亡者はたがいにとどめてはならない。ひそかに間諜をやり、辺境の人びとを誘い騒がせてはならない。……（宣和五年三月に宋皇帝より金皇帝に宛てた誓書。巻15 宣和五年四月十一日所引「金人誓書」に引用される宋の誓書、『弔伐録』に誓書全文を載録、原文は史料12下線）

→張覚問題での宋の不手際、金の南征開始を招く決定的な失策となる

### ②宋の朝廷の政策を批判したり戦闘で国に殉じたりした「忠臣義士」の顕彰

- ・政和八年(1118)の女真への遣使、それ以後の金と結んで遼を討つことにたいする反対論：  
太宰鄭居中の上奏（巻1 政和八年四月二十七日）、知枢密院事鄧洵武の上書（巻1 政和八年四月二十七日『鄧洵武家傳』、趙普が宋初の雍熙三年(986)に太宗を諫めた「燕を伐つを諫めるの疏」を附す）、広安軍草澤安堯臣の上書（巻2 政和八年五月二十七日）、宋昭の上書（巻8 宣和四年六月三日）、宇文虚中の劄子（巻9 宣和四年八月丁亥朔）、真定府安撫使洪中孚の上奏（巻19 宣和六年八月九日『洪中孚家傳』）
- いずれも長大な上奏文（意見書）の全文を載録、童貫・王黼らが主導した朝廷の誤った方針に真っ向から異を唱えた当時の数少ない正論を後世に伝えて顕彰する目的
- ・国に殉じた「義士」の顕彰：幹離不の燕山侵攻軍、国境でたまたま接伴賀正旦使（金からの使者の迎撃を担当する使者）として出くわした傳察が屈せずに殺された記事（巻22 宣和七年十一月二十一日所引『封氏紀年』、李邴「傳察墓誌」、『靖康小雅』）、粘罕の代州包囲により崞県都巡檢使李翼が死んだ記事（巻25 宣和七年十二月十七日、同日所引續齊「李翼行状」）

→墓誌や行状などの伝記史料を全文載録して「義士」を顕彰。こうした記録は、戦闘記事の増える「靖康中帙」以後に多数見える

### ○宋金間交渉史料としての価値

- ・宋使の記録——趙良嗣と馬植  
趙良嗣（?～1126）：燕京出身、もとの名は馬植、遼に仕える。童貫が遼へ使者として派遣された時に出会ったとの説あり。宋へ亡命（政和二年説と五年説あり）、童貫に抜擢され、金と結んで遼を攻める策を献じて、徽宗皇帝より国姓の趙良嗣の名を賜る。宣和二年以後、金との交渉のために何度も使者として派

遣される。靖康元年、金軍の侵攻を招いた原因をつくったとして弾劾され、処刑される

馬拯 (?~1151) : 熙州の人、父の馬政に従い登州に居住、武挙出身。宣和二年(1120)に登州知事の推薦で父が使者として派遣されたのに従って以来、金との交渉に何度も派遣されたほか、軍事にも通じ、童貫・王黼・鄭居中などの高官に献策。靖康の変を経て、義軍を率いて金に抵抗、南宋建国後は苗劉の乱という兵乱を平定するなど活躍。「乱世中に現れた英雄人物」と評価される(黄寛重 1993B による)

趙良嗣『燕雲奉使録』・馬拯『茆齋自叙』: 宋金間交渉の経緯を克明に伝える文献、とりわけ金の皇帝・高官・使者とのあいだの口頭での交渉を口語体の白話で記した部分がかなりの分量あり、宋代の言語資料としてきわめて貴重(梅祖麟 2000。劉堅・蔣紹愚主編 1992 に両者の点校本を載録)。交渉時に金人は女真語で話しており、通訳が漢語に訳したものを記録。なお、『茆齋自叙』は交渉のみならず、宋金関係の細部と大局を記録した文献として、徐夢莘は高く評価していたようで、『会編』に多く引用される

ただしこれらの文献は、趙良嗣・馬拯個人の著述であり、上述のような宋の劣勢下で、いかに自分が力を尽くして金側と交渉したかを弁明しアピールする内容になっている点には留意が必要。たとえば趙良嗣と馬拯が同時に派遣されたときについては、馬拯はしばしば趙良嗣の言動などを痛烈に批判していて、両者の記録に食い違いが生じているところがある

趙良嗣や馬拯の記録を読んでいくと、宋が失策を重ねて金が軍事力で圧倒するという趨勢のもと、彼らにとって金の阿骨打とその謀臣たちが非常に手強い交渉相手であったことが明らかになる

例: 方臘の乱により宋側から交渉を断絶したあと、宣和四年(1122)十一月に燕京攻略後の阿骨打のもとに交渉再開のために向かった趙良嗣が残した記録

この日、阿骨打は趙良嗣に蒲結奴(=蒲家奴、昱)と事を議論させた。蒲結奴が言うには、「去年わが国はわざわざ使者を派遣してこのような大きな国事を協議させ、兵馬をとどめて、ひたすら貴国の返答の使者を待って契丹をうち滅ぼすことを約束しようとしていた。それなのに我が使者を留めて、なんと半年も居させて、出兵の時期を滞らせてしまったうえに、返答の使者を遣わさず、ただ中身のない文書を、兵卒に海を渡って送って来させたのは、もはや貴国が関係を断絶しようと考えているということである。このことは言うのをやめて、別のことを話そう。挾撃について言えば、わが国の兵馬は去年の十一月より出兵し、今年の正月に中京に達し、三月に西京に達し、もう半年になり、たいへんな苦勞をしたところなのに、貴国は五月になってようやく出兵し、ゆっくりと楽をして汚い手を使い、いったい何が挾撃だと言うのだ。このこともまた言うのはやめよう。皇帝(=阿骨打)のご命令があり、貴国が去年使者を遣わさなかったのはまさしく信を失することであり、今年兵を出したとしても、それでもなお約束の通りということにはならないが、もうやめにしよう。……」(卷 11 宣和四年十一月一日所引『燕雲奉使録』、原文は史料 13 下線)

例: 宣和七年(1125)十一月に雲中で宋への侵攻を準備中の金側の最高司令官粘罕が、出兵を思いとどまらせようと弁明し請願する宋使馬拯に対して発した最後通告

粘罕は笑って言うには、「なんじらの国はもう使える人がおらず、ただ内官に委ねるばかりだ(=河北燕山府路宣撫使として宦官の譚稹に代わり宦官の童貫を再起用したことを指す)。山後の土地(=太行山脈の西側、雲中など山西省北部から河北省北部一帯を指す)をはじめに許した時には、おそらく大聖皇帝(=阿骨打)の恩義により、趙皇(=宋皇帝)の海辺での友好の思い(=最初に山東・遼東の海上ルートを通じて交渉したことを指す)に答えて、それぞれ誓書を立てて、永遠に友好関係となったのである。思いもよらず、大聖皇帝が崩じたばかりで、柩をかついでまだ国に帰らず、土地の

引き渡しも終わらないうちから、貴国は早くも盟約に背き、ひそかに張覚を匿って、燕京から逃れた職官や民戸を受け入れて、わが国が何度も身柄の引き渡しを求めているのに、ただうわべだけ文書を送ってくるばかりである。貴国は国土が広大で、国が富んで民の多いことを自慢しているが、わが国は小さいとはいえ、これまで道理を失するようなめったなことはしたことがない。貴国には少しは物事の是非をわきまえてもらいたい。」(巻 22 宣和七年十一月十九日所引『茆齋自叙』、原文は史料 14)

#### ・交渉関連の文書史料の価値

使者が携えた宋金両国の国書など交渉文書の全文を載録。文書の書式や交渉の経緯を正確に理解するうえできわめて貴重な記録

例：金から宋に送られた二通目の国書：燕京の地と所管漢民の割譲を認めたことをふまえたうえで、西京の挾撃について確認する内容。遼宋皇帝間でやり取りされた「致書」形式の書簡

正月日、大金皇帝が大宋皇帝のもとへ書を送ります。使者をお送りいただき、遠方までその美名を示し、別につづった言葉を詳しく述べ、書簡に含まれない気持ちもつぶさに表されています。事はつまびらかにしてから後にはかるべきで、礼はそなえて先に聞くべきものです。さきごろ、趙良嗣らが帰ってきて、燕京とその所管の州を与えると許したことについて、国書には「もし挾撃しなければ、すでに許したことに応じがたいです」とありました。今もし更に西京を求めるのであれば、しかるべくはかつて取っていただきたく、もし思い通りにしがたいのであれば、お知らせいただきたい。このような事情であるのでまだ挙兵の正確な時期を言わないのです。五関と領土については、事が終わったのちに決めればよいでしょう。春に入り、めでたいことの多からんことを。今勃董曷魯と大迪烏を遣わして国信使・副使とします。すこしばかりの礼物がありますので、これを別録に載せます。もっぱら書を奉る。不宣。謹んで申し上げる。(巻 4 宣和三年正月「金人國書」、原文は史料 15)

#### ・金史史料としての価値

交渉などのために金の皇帝(阿骨打・呉乞買)の居所(本拠地按出虎水の御寨、出先の奉聖州や燕京の帳幕(「軍前」))を訪れた宋使の記録：『燕雲奉使録』『茆齋自叙』のほか、宣和七年正月に金の新帝呉乞買(太宗)の即位を祝賀するために派遣された許亢宗の随員鍾邦直『宣和乙巳奉使行程録』(巻 20 宣和七年正月二十日所引＝旅程を克明に記し、宣和七年当時の燕山から御寨に至るまでの北方各地の歴史地理史料としての価値)

そのほか、『会編』所収の汪藻『裔夷謀夏録』(単行の鈔本あり：苗潤博 2016・李京沢 2020 参照)、史愿『金人亡遼録』、洪皓『松漠記聞』(単行の鈔本・刻本あり：外山 1978・康鵬 2012 参照)、張匯『金虜節要』など、これら諸書をまとめた『会編』巻 3 の女真記事(既述)

→金の歴史を知るための文献史料、『金史』など数えるほどしかなく、契丹史(遼史)と異なり新出考古資料も少なく、利用可能な史料は欠乏。『会編』所収のこれらの文献、他者の目線にとらえた建国後間もない金国中枢部の記録として価値あり、『金史』などの金側史料では知り得ない情報を伝える

例：宣和二年(1120)十一月に父の馬政の奉使に随行して金の本拠地の御寨まで旅した馬括、金の中枢部の女真人たちの生活・風習などを記録、そのなかに卷狩の描写あり

＝中央ユーラシア狩猟遊牧民の卷狩、軍事演習の意味合いあり (Allsen2006)。狩猟民の卷狩を詳細に記した漢語史料の記事としては最も古いものか？

毎朝、阿骨打は積雪の上にむしろと虎の皮を敷いて、風を背にして座り、前には草木を燃やす。率いてきた酋長たちがやって来て、それぞれに分けた矢一隻を取って投げ遠近を占い、それぞれ占った結

果に従って、左右に分かれて馬に乗り、率いてきた軍馬を散開させて単騎で進む。それぞれの騎馬は五歩から七歩ほど離れ、後に従って絶えることなく、両方の先頭がたがいに視認するが、常に十里から二十里に及んだ。散開して囲いができあがるのを待って、阿骨打は馬に乗り、しんがりから一、二里離れ、認旗（＝皇帝のもとにあって指示を出す旗）を立てて行き、両翼の騎兵は、旗を見て進む。すべて野獣の内から外へと出てきたものは、四周から迎えて射かけてよく、外から内へ入ってくるものは、必ず主酋が先に射る。そもそも囲いは箕の掌のような形で、ゆっくりと三、四十里ばかり進み、宿営できる場所が近づくと、ただちに両端が囲いを閉じて次第に狭くして行って、少しの間に二、三十の囲みを作って、野獣が走り回るのを射たり撃ったりして、すべて仕留める。阿骨打はまた皮の座席を設けて、火をつけて肉をあぶり焼いて食べ、生のまま切るのもあり、酒を一、二杯飲む。騎馬は散らばって宿営する。阿骨打は常々「わが国での一番の楽しみは、狩りに及ぶものはない」と言っていた。その行軍の布陣は、おおよそここから生じたものだ。（巻4 宣和二年十一月二十九日所引『茆齋自叙』、原文は史料 16）

## 参考文献

※『三朝北盟会編』関連

王徳毅 1965「徐夢莘年表」『大陸雜誌』31 卷 8 期（のち宋史座談会編『宋史研究集』8 輯、中華叢書編審委員会、1976 年、505-531 頁再録）

邱靖嘉 2018「国家図書館蔵《三朝北盟会編》明抄本考略——兼与許刻本相較」『文史』2018 年 3 輯（総 124 輯）、187-204 頁

邱靖嘉 2019A「清修《四庫全書》刪改問題芻議——以校辦《三朝北盟会編》為例」『清史研究』2019 年 2 期、40-50 頁

邱靖嘉 2019B「女真史料の深翻与検討——《三朝北盟会編》卷三研読記」『中華文史論叢』2019 年 2 期（総 134 期）、195-229 頁

黄寛重 2003「《永樂大典》中《三朝北盟会編》史料及其相關問題」『文献』2003 年 2 期、98-112 頁（同『史事、文献与人物——宋史研究論文集』東大図書公司、2003 年、71-86 頁所収）

陳楽素 1934「徐夢莘考」『国学季刊』4 卷 3 号（のち陳楽素『求是集』第一集、広東人民出版社、1986 年、101-139 頁再録）

陳楽素 1936「三朝北盟会編考」国立中央研究院『歴史語言研究所集刊』第 6 本、第 2・3 分冊、192-279・281-341 頁（のち陳楽素『求是集』第一集、140-355 頁再録）

鄧広銘・劉浦江 1998「《三朝北盟会編》研究」『文献』1998 年 1 期、93-117 頁（のち劉浦江『遼金史論』中華書局、2019 年、318-341 頁再録）

※その他

燕永成 2007『南宋史学研究』甘肅人民出版社

黃寬重 1993A「馬紘与兩宋之際的政局變動」同『宋史叢論』新文豐出版公司、1-40 頁（初出 1992 年）

黃寬重 1993B「秦桧与文字獄」前掲『宋史叢論』、41-72 頁（初出 1993）

黃寬重 2003「宋史研究的過去与未来」前掲『史事、文献与人物——宋史研究論文集』、221-247 頁（初出 2000 年）

康鵬 2012「《松漠記聞》版本源流考」遼寧省遼金契丹女真史研究会編『遼金歷史与考古國際學術研討會論文集』遼寧教育出版社、589-598 頁

蔡涵墨（Charles Hartman）2016『歷史的嚴粧——解讀道學陰影下的南宋史學』中華書局

蔡崇榜 1991『宋代修史制度研究』文津出版社

外山軍治 1964『金朝史研究』東洋史研究会

外山軍治 1978「洪皓と松漠紀聞」『愛泉女子短期大學紀要』12/13 号、57-76 号

梅祖麟 2000「《三朝北盟會編》里的白話資料」同『梅祖麟語言學論文集』商務印書館、28-61 頁（初出 1980）

苗潤博 2016「有関《裔夷謀夏錄》諸問題的新考索」『文史』2016 年 2 輯（總 115 輯）、125-148 頁

古松崇志 2007「契丹・宋間の澶淵体制における国境」『史林』90 卷 1 号、28-61 頁

古松崇志 2011「10～13 世紀多国並存時代のユーラシア東方における国際関係」『中国史学』21 卷、113-130 頁

古松崇志 2020『草原の制覇：大モンゴルまで』（岩波新書シリーズ中国の歴史 3）岩波書店

古松崇志・白杵勲・藤原崇人・武田和哉（編）2019『金・女真の歴史とユーラシア東方』勉誠出版

李京沢 2020「汪藻《裔夷謀夏錄》再探」『文献』2020 年 3 期、53-66 頁

劉堅・蔣紹愚主編 1992『近代漢語語法資料彙編：宋代卷』商務印書館

Allsen, Thomas T. 2006, *The Royal Hunt in Eurasian History.*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press

史料 1 樓鑰『攻媿先生文集』卷一一五、直秘閣徐公墓誌銘（北京大學所藏宋四明樓氏家刻本、景印本＝『中華再造善本』唐宋編集部、北京圖書館出版社、2005 年所收）

（※タイトルの「直秘閣徐公墓誌銘」と本文冒頭の「慶元二年有旨……故有是命」の部分（第一葉）は宋本闕葉、『攻媿集』卷一〇八（『四部叢刊』所收武英殿聚珍版本）による）

①慶元二年（1196）有旨，朝散大夫徐夢莘除直秘閣，蓋異恩也。②始公生于靖康之初元，歲在丙午（1126），是冬金人再犯闕，海內雲擾。建炎二年（「三年」（1129）の誤り），寇躡江右，叛將大盜蜂起。公之生纔四年，母氏襁負，走陂頭劉氏家，僅免于難。③公既省事，自念生長兵間，欲得盡見事之始末，④宦游四方，收羅野史及他文書，多至二百餘家，爲編年之體，會粹成書，傳聞異辭者，又從而訂正之，號三朝北盟集編。⑤自政和七年（1117）海上之盟，迄逆亮之斃，上下四十五載間，⑥具列事實、制敕、詔誥、國書、奏疏、記序、碑誌之文，有正史所不及載者，搜掇無遺，成二百五十卷。又有綱目一冊，併藏于家。⑦至是，史官方修高宗皇帝實錄，修撰楊公輔率同寮十人，奏乞取公所編之書，仍下臨江軍，給筆札抄錄以進。⑧十一月，史官又奏，其書有補于史筆爲多，仍薦公之賢，大略云，廉靜樂道，好學不衰。故有是命。⑨又奏，所編書目內有百餘家，館所未備，復命錄其全書。⑩諸公欲相挽一出，與同筆削，有諭公者。答曰，此書本不爲進身計。力辭之。⑪後又得未見之書，再編集補三帙。所居闢一堂，取詞命褒語，扁曰儒榮，以侈上賜。樞密劉公德秀爲之記，待制楊公萬里爲之銘。少傅周公必大、端明洪公邁而下，賦詩者數百篇，遠邇流傳，而公之名愈顯矣。

公字商老，清江縣人。曾祖用和、祖士穩，俱不仕。父世亨，累贈通議大夫。母楊氏，贈碩人。

⑫公俊敏篤學，至忘飢渴寒暑。讀書過眼輒不忘，通貫經史百家，尤熟晉宋南北五代時事。自熙豐元祐以來名公奏議及出處，大致無不該綜。作文皆有根據，用事精確。

紹興二十四年（1154），登進士科，授左迪功郎、洪州新建縣尉，以外艱不赴。調鬱林州司戶參軍，到官未幾，又以母憂而歸。後爲江陵府司戶，任滿，闕陞左從政郎。乾道四年（1168），外移南安軍教授，以舉主改宣教郎、知潭州湘陰縣。次授廣南西路轉運司主管文字、賜緋衣銀魚。諸司辟知賓州，到郡遭罷，主管建寧府武夷山沖佑觀、華州雲臺觀。紹熙元年（1190），授荆湖北路安撫司參議官。慶元初（1195），引親嫌徑歸，再奉沖佑祠，引年致仕。六年（1200），賜紫衣金魚。仕宦幾五十年，間居之日爲多。

南安官舍素在城外，請遷入，以附校官。建雲漢閣以奉御書，立濂谿、二程先生祠于左，劉元城、張橫浦先生祠於右，自爲之記。參政龔公茂良時帥江西，讀而善之，以講筵官薦。

湘陰竝湖，少田多盜，帥括盜耕湖田者悉輸租，號增耕稅，他邑或移別賦應命。公恐重困吾民，謂邑無新田，稅無從出。帥盛怒，移湘潭丞，仍窘撫邑事，無可疵瑕者，卒免于行，更加禮焉。增葺學宮，嚴設祠像，祭器、書籍，以次而舉，選士主之，湘陰於是始興於學矣。

朝廷議更二廣鹽法，遣浙西安撫司幹官胡廷直銜命與二漕臣集議境上，西漕王公正己以公審知利害，邀至蒼梧會所。公謂二廣事體不同，使者徒見東路郡多瀕江，可通客販，固已非是。若西路多山，郡近江者少，道阻運艱，客販不通，價必騰踊，郡計不給，重爲民害。郡有兵吏可役，民不告勞，若止循官般舊法，初無抑配等弊，公私俱便，可以經久。衆不能奪，胡亦是之，議定而去。將入奏，爲主議者所誅，畏罪希進，盡變其說，擢爲東路提舉，旋升西漕。侍郎詹公儀之出鎮桂林，共行客販之策，慮公或以賓州奏事，必撼成說，武憲熊飛素不快於公，二人從而甚之，熊上悔舉之章，公遂罷。不三年，二廣之害果如公言，民食貴鹽，富商至破產喪生。胡憂懼至死，詹亦得罪，復行舊制，至今便之。周益公當軸，謂公前謾未直，公答以事久自明，不待辨也。

歸而悼亡，連喪子女，宦情愈泊然矣。楊誠齋挽使造朝，薦進甚力，廟堂將處內郡，止求議幕。荆帥樞使王

公藺移鎮長沙，以公可任帥事，申省委公。經時而侍郎袁公樞始來，知公止請上幕俸給，盡以三月帥俸歸之，又力辭，尤歎其廉。既而從母之子侍郎彭公龜年爲帥，公去替止半年，法不用避，公乞祠以去。彭公餞以詩云，法許公不許，法不如公嚴。

年雖已高，手不釋卷。有讀書記忘、集醫錄、集僊後錄各三冊，會錄四冊，皆以儒榮冠其目。家有萬書閣，籤帙甚整，能視細字，如年少時。事親盡孝，祭器封鐫惟謹。有家記一編，載時祀禮式。又揭百不憂堂，以志義方之效。閣前亂石森立，石間多紅薇花，若張錦然，號紫薇洞天。勝日深衣坐閣下，二鶴翔舞于前，殆神僊中人也。弟妹四人，弟得之，亦休官而歸。時節聚會，子孫甥壻羅拜爲壽，竟觴卜夜無倦色。從母昆弟七人，時置酒款集。韋濟川楫、黃仲禮琮、彭子壽而下俱效之。開禧元年（1205），親黨爲八十之慶，宴笑數日，乃罷。中嬰小疾，精明如故，猶能課諸孫誦習。三年八月（1207），浴出，瞑目危坐而化，二十有一日也。

娶豐城鄢氏，先公二十一年卒，封贈至宜人。五男子。簡，從事郎、新邵州新化縣令。範，迪功郎、新袁州司理參軍。籛，業進士。次子符，幼子節，皆蚤歿。二女。長適免解進士曾三異，次適進士鄒時，亦前卒。孫男十人。長峯，亡矣。次嶢、次金西，薦于鄉。崧、錢、嘗、崇、嶷、襄、歲。一女。適鄉貢進士向公美。曾孫二人。郊、郁。二女尚幼。諸孤以嘉定元年（1208）十一月庚申奉公之柩，葬于縣之修德鄉古牛岡之原。始某屏居四明，得子壽書，俾爲儒榮堂賦詩。時雖抱病，爲作古風寄之。已而子壽與公俱以書來謝。比聞子壽之訃，固已不堪云亡之痛，而公亦下世矣。公既葬之二年，簡以赴調來見，謂前詩恨未見北盟全書，盡錄以見遺。<sup>⑬</sup>又出其季父致政所作行狀求銘。致政嘗著左氏國紀，中書舍人陳公傅良爲之序，蓋深於經者，書事尤覈。敬掇其狀而爲之銘。銘曰，靖康虜禍，古所未有。凡曰臣子，痛心疾首。公生初元，以及己酉。犬羊長驅，薦食江右。幼而得全，實賴襁負。少長讀書，志已不苟。宦游四方，諮訪尋究。網羅舊聞，編不停手。二百餘家，筆下輻湊。繫日繫年，別記誰某。有制有書，有疏有奏。衆說雜然，考證是否。名聞于朝，六丁下取。蓬萊漢閣，寵數加厚。儒榮名堂，足以不朽。才不盡用，仕多不偶。身退名尊，二疏俱壽。奄然僊去，何憾何咎。有子克孝，慶流在後。銘以發之，尚照林藪。

## 史料 2 《宋史》卷四三八、儒林傳八、徐夢莘傳

徐夢莘字商老，臨江人。幼慧，耽嗜經史，下至稗官小說，寓目成誦。紹興二十四年舉進士。歷官爲南安軍教授。改知湘陰縣。會湖南帥括田，號增耕稅，他邑奉令惟謹。夢莘獨謂邑無新田，租稅無從出。帥恚其私於民，欲從簿書間攬摭其過，終莫能得，由是反器重之。

尋主管廣西轉運司文字。時朝廷議易二廣鹽法，遣廣西安撫司幹官胡廷直與東西漕臣集議于境。夢莘從行謂，「廣西阻山，止當仍官般法，則害不及民。廣東諸郡並江，或可容客販，未宜遽以二廣概行。」議與廷直不合。廷直竟遂其說，以客販變法得爲轉運使。夢莘既知賓州，猶以前議爲梗法，罷去。不三年，二廣商賈毀業，民苦無鹽，復從官般法矣。

夢莘恬於榮進，每念生於靖康之亂，四歲而江西阻訐，母襁負亡去，得免。思究見顛末，乃網羅舊聞，會粹同異，爲三朝北盟會編二百五十卷，自政和七年海上之盟，訖紹興三十一年完顏亮之斃，上下四十五年，凡日敕、日制、誥詔、國書、書疏、奏議、記序、碑志，登載靡遺。帝聞而嘉之，擢直秘閣。

夢莘平生多所著，有集補，有會錄，有讀書記志，有集醫錄，有集仙錄，皆以「儒榮」冠之。其嗜學博文，蓋孜孜焉死而後已者。開禧元年秋八月，卒，年八十二。

## 史料 3 徐夢莘「三朝北盟集編序」（『三朝北盟會編』卷首）

嗚呼，靖康之禍，古未有也。夷狄爲中國患久矣。昔在虞周，猶不免有苗、玁狁之征，漢唐以來，如冒頓之圍平城，佛狸之臨瓜步，頡利之盟渭上，此其盛者。又其甚則屠各陷洛，耶律入汴而已。是皆乘草昧凌遲之

時，未聞以全治盛際遭此，其易且酷也。揆厥造端，誤國首惡，罪有在矣，迨至臨難，無不恨焉。當其兩河長驅而來，使有以死捍敵，青城變議之日，使有以死拒命，尚可挫其兇焰，而折其姦鋒。惜乎伏節死義之士，僅有一二，而媮生嗜利之徒，雖近臣名士，俯首承順，唯恐其後，文吏武將，望風降走，比比皆是。使彼公肆凌藉，知無人焉故也，尚忍言之哉。①摺紳草茅，傷時感事，忠憤所激，據所聞見，筆而為記錄者，無慮數百家。然各說有同異，事有疑信，深懼日月浸久，是非混并，臣子大節，邪正莫辨，一介忠款，湮沒不傳。②於是取諸家所及詔敕、制誥、書疏、奏議、記傳、行實、碑誌、文集、雜著，事涉北盟者，悉取詮次，③起政和七年登州航海通好之初，終紹興三十二年逆亮犯淮敗盟之日，繫以日月，以政宣為上帙，靖康為中帙，建炎、紹興為下帙，總名曰三朝北盟集編，盡四十有六年，分二百五十卷。④其辭則因元本之舊，其事則集諸家之說，不敢私為去取，不敢妄立褒貶，參考折衷，其實自見，使忠臣義士、亂臣賊子善惡之迹，萬世之下，不得而掩，自成一家之書，以補史官之闕，此集編之本志也。若夫事不主此，皆在所略，嗣有所得，續繫於後。⑤如洪內翰〔邁〕國史、李侍郎〔燾〕長編并四繫錄，已上太史氏，茲不重錄云。焉逢攝提格紹熙五年（1194）十二月嘉平日，朝散大夫荆湖北路安撫司參議官賜緋魚袋臣徐〔夢莘〕謹序。

#### 史料4 『四庫全書總目提要』史部五、紀事本末類

##### 三朝北盟會編 二百五十卷【左都御史張若淮家藏本】

宋徐夢莘撰。夢莘字商老，臨江人。紹興二十四年進士，為南安軍教授，改知湘陰縣，官至知賓州，以議鹽法不合罷歸。事蹟具宋史儒林傳。夢莘嗜學博聞，生平多所著述。史稱其恬於榮進，每念生靖康之亂，思究見顛末，乃網羅舊聞，薈萃同異，為三朝北盟會編。自政和七年海上之盟，迄紹興三十一年，上下四十五年。凡敕制誥詔、國書、書疏、奏議、記序、碑志，登載靡遺。帝聞而嘉之，擢直祕省云云。今其書鈔本尚存。凡分上中下三帙，上為政宣二十五卷，中為靖康七十五卷，下為炎興一百五十卷。其起訖年月，與史所言合。所引書一百二種，雜考私書八十四種，金國諸錄十種，共一百九十六種。而文集之類，尚不數焉。史所言者，殊未盡也。凡宋金通和、用兵之事，悉為詮次本末，年經月緯，按日臚載，惟靖康中帙之末，有諸錄雜記五卷，則以無年月可繫者，別加編次，附之於末。其徵引皆全錄原文，無所去取，亦無所論斷。蓋是非並見，同異互存，以備史家之採擇，故以會編為名。然自汴都喪敗，及南渡立國之始，其治亂得失，循文考證，比事推求，已皆可具見其所以然，非徒餽釘瑣碎已也。雖其時說部糅雜，所記金人事蹟，往往傳聞失實，不盡可憑，又當日臣僚劄奏，亦多誇張無據之詞，夢莘概錄全文，均未能持擇，要其博瞻淹通。南宋諸野史中，自李心傳繫年要錄以外，未有能過之者，固不以繁蕪病矣。考夢莘成書後，又以前載不盡者五家，續編次於中下二帙，以補其闕，靖康炎興，各為二十五卷，名曰北盟集補。今此本無之。殆當時二本各行，故久而亡佚歟。

#### 史料5 余嘉錫『四庫提要辨證』卷四、史部二、紀事本末類、三朝北盟會編二百五十卷

嘉錫案，提要既言是編年經月緯，案日臚載，則何以不隸之編年，而乃屬之紀事本末者，則以所記純關於宋金通和用兵之事，且其諸錄雜記五卷，無年月可繫，正是本類。小序所謂不標紀事本末之名，而實為紀事本末者亦併著錄也。然紀事本末之體，始於袁樞，夢莘登第在樞之前，故宋人之論此書者，大抵仍以為編年體。樓鑰攻媿集卷一百八直秘閣徐公墓誌銘云，「收羅野史及他文書，多至二百餘家，為編年之體，會粹成書。」則在當時，不以為紀事本末亦明矣。王應麟玉海卷四十七亦云，「徐夢莘收羅野史及他文書，多至二百餘家，為編年之體，會粹成書，傳聞異辭者，又從而訂正之，號三朝北盟集編。自政和七年海上之盟迄逆亮之斃，上下四十五載，具列事實、制勅、詔誥、國書、奏疏、記序、碑誌之文，成二百五十卷，又綱目一冊。慶元二年，下臨江軍鈔錄以進。十一月，除直秘閣。後又得未見之書，再編集補三帙。」

#### 史料6 袁桷『清容居士集』卷四一、修遼金宋史搜訪遺書條例事狀

猥以非才備員史館，幾二十年。近復進直翰林，仍兼史職，苟度歲月，實爲罔功。伏觀先朝聖訓，屢命史臣纂修遼金宋史，因循未就。推原前代亡國之史，皆係一統之後，史官所成。若齊、梁、陳、隋、周五代正史，李延壽南北史，房玄齡等晉書，或稱御撰，或著史臣，此皆唐太宗右文稽古，數百年分裂事志，悉得全備。至宋倣依唐世，爰設官局，以成唐書。是則先朝屢命，有合太宗文明之盛。卑職生長南方，遼金舊事，鮮所知聞，中原諸老家有其書，必能搜羅會萃以成信史。竊伏自念，先高叔祖少傅正獻公燮，當嘉定間，以禮部侍郎、秘書監專修宋史，具有成書。曾祖太師樞密越公韶爲秘書著作郎，遷秘書丞，同預史事。曾叔祖少傅正肅公甫、吏部尚書商，俱以尚書修撰實錄。譾薄弱息，獲際聖朝，以繼先躅。宋世九朝，雖有正史，一時避忌，今已易代，所宜改正。昔司馬遷、班固，皆以父子相傳，遂能成書，劉知幾、劉餗、劉贊，咸以家世舊聞撰成史通、史例，輒不自揆，庸用條析。兼本院宋朝名臣文集，及雜書紀載，悉皆遺缺，亦當著具書目，以備采擇者。

一，宋太祖實錄，舊有兩本……

……

一，洪邁作神、哲、徽、欽四朝史。于時高宗在德壽宮，多所避忌，立傳亦有蕪類，所宜刊削，當直書徽宗亡國之罪。

一，徽宗違盟契丹，童貫復燕城，正史回避，所合改正。

一，徽欽圍城受辱，北行遭幽，正史不載。所有雜書野史，可備編纂，今具于后。

三朝北盟會編 靖康傳信錄 孤臣泣血錄 靖康草史 靖康奉使 靖康遺錄 裔夷謀夏錄 陷燕記 南歸錄 靖康錄 犯闕錄 僞楚錄 松漠紀聞 僞齊錄 起戎錄 痛憤錄 建炎復辟記 己酉航海記 建炎扈從錄 中興遺史

……

自惟志學之歲，宋科舉已廢，遂得專意宋史，亦嘗分彙雜書、文集，及本傳語錄，以次分別。不幸西城火災，舊書盡燬。然而家世舊聞，耳受目覩，猶能記憶。或者謂國亡史不宜脩。南方鄙儒，詎敢置論，年齒衰邁，分宜歸老田里，曠官糜職，實爲罔功。而區區素蘊，亦漸別白，以稱朝廷獎拔之厚。凡所具遺書，散在東南，日就湮落，或得搜訪，或得給筆札傳錄，庶能成書，以備一代之史。謹呈翰林國史院，謹狀。

**史料 7** 袁祖安「跋」（『三朝北盟會編』袁祖安木活字本卷首）

按是書體裁與李文簡公續通鑑長編相爲表裏，李書卷帙繁重，最爲趙宋別史大觀，溯其紀載源流，自北宋開基，至南宋中興而止。今閱其書，中間治平、熙寧、元祐、紹聖各年已多闕佚，而道君、少帝、光堯三朝，更復一字無存，攷古者，每以爲憾。商老之生也，稍後於文簡，自以身逢衰亂，哀集政和丁酉至紹興辛巳四十五年間見聞，著爲三朝北盟會編。跡其採摭博瞻，紀述詳盡，不特可備天水文獻，似可爲文簡功臣，洵至寶也。惟是書向未鋟板，即鈔本流傳者亦尠，余從方柳橋太守功惠家假得之，半皆蠹蝕，僅有字畫可辨，亦既丹黃滿紙，塗乙不少，就中仍多訛謬。爰偕彭貽孫君穀、胡衡齋鑑兩同年暨孫稼亭福清、王九芝倬韓、曾幹臣行崧、賴子奎煥辰諸同好，各竭目力，反復讐校，凡屬上下文義可以體會，及引證原書可以參攷者，亟爲更正。其有字句之間無從索解，而又無善本校勘者，概從闕疑之例，以俟補刊，並仿嘉慶年間昭文張金吾月霄氏用活字板排印長編之法。鳩集二三同志，捐貲從事。溯自丁丑（光緒三年、1877）春末迄於己卯（光緒五年）春仲，凡閱兩暮，而始蒇事，計共刷印五百部，借以稍廣流傳。有志稽古者，或亦先覩爲快也。如皋後學惇哉氏袁祖安謹跋。

**史料 8** 許涵度「校刊三朝北盟會編序」（『三朝北盟會編』許涵度刊本卷首）

古有外患，無專恃外交以立國者。至宋而國體一變，政和七年前求和契丹，七年後求和於金以拒之，契丹亡

而宋岌乎不能支，和局愈不可問。至紹興中葉，完顏亮自弊，始稍稍行成，四十餘年南北邦交。金史既病其缺漏，宋史則疏舛之與蕪雜又兼病焉，若李燾通鑑長編、李心傳繫年要錄，皆私家著述之善者，然長編闕微、欽二朝，要錄亦僅紀高宗事，均不足爲今日考鏡之資。惟臨江徐商老殫見洽聞，取材一百九十六種，以成是編，錄敘時事，不加論斷，而宋金交涉，已朗若列眉。題曰北盟，蓋注意於和拒得失，而爲專門外交史權輿也。夫國與國交，往往判榮辱於一舉一動，爭權力於一字一言，訂約少疏，增幣鉅萬，而其他之相因而起者，且日甚一日，即欲挽救而無復可爲。後之人推原禍始，將爬羅剔抉於當日籌議情形與夫往來關鍵，以資法戒，則是編之繫人家國，豈淺尠哉。惜向係傳藁，雖經鈔入四庫，汔無剗削，近行聚珍本，奪譌特甚。余藩蜀得舊鈔於陶星如太守家瑤，乃乾隆間吳甌亭、朱映溍、江良庭、彭文勤諸博雅校正者，洵善本也。公暇畧加審對，益致憾於聚珍之誤，又懼孤帙之久而軼焉。爰撥廉金如千兩，屬唐百川觀察鴻學，付諸手民。外交家鑑古知今，致慨於北盟屢寒，界碑有足，東盟西盟，每下愈況，求絕學於專史，妙運用於一心，必將家置一編，奉耄老爲不祧少祖，則是刻也，豈僅僅爲當時和拒乖方，虛寄隱痛云爾哉。工既竣，表數語簡端，以餉後之謀國者。光緒三十四年太歲戊申清苑許涵度撰。

**史料 9** 傅增湘『藏園群書題記』卷二、史部一 編年類（上海古籍出版社、1989 年、124 頁）

鈔本三朝北盟會編跋

舊寫本，十四行，行二十四字，語涉宋帝皆提行，源出宋刊，蓋愛日精廬藏書也。首徐夢莘紹熙五年自序，次引用書目，羅列至一百九十六事。目錄一至二十五爲政宣上帙，二十六至一百爲靖康中帙，一百一至二百五十爲炎興下帙，起政和七年七月四日，訖紹興三十二年四月二十一日，凡四十有六年。

按，此書宋以後久無刊本，光緒初元粵中以活字排印行世，而脫誤至不可勝計，甚者連篇累葉，刪落凌亂，真有刻如不刻之歎。戊申歲，許布政涵度依吳甌亭、朱映溍、江良庭、彭芸楣校本，於吾蜀鐫板，更逐卷附以校記，掃塵之功甚偉。今以此本對勘，符契至多，而單詞贅句，此勝於彭校本尚夥。蓋月霄秘冊，其所從來者舊也。

卷中鈐收藏印記有「張月霄印」、「愛日精廬藏書」、「秘冊」、「碧山柏氏」、「潘茶坡圖書印」、「潘氏桐西書屋之印」、「茶坡」、「介繁珍藏之印」、「鄧尉山樵」、「乃今日之介也」諸印。

**史料 10** 張元濟『涵芬樓燼餘書錄』史部（『張元濟古籍書目題跋彙編』中冊、482 頁所收）

三朝北盟會編殘二百三十卷 宋徐夢莘編 明鈔本 四十六冊 何子宣季滄葦張子謙張金吾汪闃源舊藏題，朝散大夫充荊湖北路安撫司參議官賜緋魚袋臣徐夢莘編集，卷首紹熙五年作者自序，次引用書名凡二百餘種。全書分上、中、下三帙，起政和七年登州航海通好之初，終紹興三十二年金主犯淮敗盟之日。以政宣爲上帙，二十五卷，靖康爲中帙，七十五卷，建炎、紹興爲下帙，一百五十卷。凡當時詔敕、制誥、書疏、奏議、記傳、行實、碑誌、文集、雜著，事涉北盟者，悉取詮次，登載靡遺。卷中語涉宋室，或提行，或空格。宋諱玄、懸、弘、殷、恒、貞、徵、讓、署、樹、豎、郢、桓、完、丸、構、搆、邁、句、鉤、慎、敦、惇等字均避，或注“廟諱”，或注“某宗廟諱”，或注“某宗廟諱同音”，亦有改書他字，如“玄”作“元”，“匡”作“康”，“胤”作“嗣”，“徵”作“證”，“桓”作“原元”者。惟擴、彊、廓、嶂等字，避稱“御名”，然構、慎、敦字，有時亦稱“御名”，蓋編纂在紹興以還，而刊行于慶元之際，先朝諱字追改不盡，故廟諱與御名雜出也。常熟邵恩多，嘗爲瞿氏校勘是書，謂，世無刊本，惟季滄葦家藏鈔本，每葉有何子宣騎縫圖記者，最爲近古，向藏蘇氏，今爲張君子謙所有。借以參校，凡訛謬脫略，悉爲訂正，可稱完善。又謂，季本以五卷爲一冊。每冊卷首俱有題銜，係徐商老原書之舊。後人芟削，僅存首卷一條，全改舊觀，云云。是本每間一葉，均有騎縫印章。上爲“躋德樓校藏”五字，下爲“何子宣躋德樓封識”八字。卷首有季、張二氏藏印，又延令書目宋元雜板書史部，有鈔本北盟會編二百五十卷，當即是書。惜卷一百十一至二十，卷一百三十六至四十五佚。

張子謙，名承煥，昭文縣人。後改名豐玉，字少庾，官江西浮梁縣縣丞，著有瓶花齋詩詞鈔，嘉道時人，瞿君鳳起云。

藏印“躋德樓藏”、“何子宣躋德樓封識”、“季振宜印”、“滄葦”、“御史之章”、“季振宜藏書”、“張承煥印”、“子謙”、“張月霄印”、“愛日精廬藏書”、“秘冊”、“汪士鐘字春霆號朗園書畫印”。

※關連する宋代避諱（（ ）内は音通も含め避ける文字）：始祖玄朗（玄、懸）、太祖の父弘殷（弘、殷）、太祖匡胤（匡、殷）、真宗恒（恒）、仁宗禎（貞、徵）、英宗曙（署、樹、豎）、徽宗佖（郅）、欽宗桓（桓、完、丸）、高宗構（構、搆、邁、句、鉤）、孝宗昚（慎）、光宗惇（敦、惇）、寧宗擴（擴、曠、廓、嶧）

史料 11 『三朝北盟會編』卷一、政和七年七月四日

①政和七年秋七月四日庚寅，登州守臣王師中奏，有遼人蘇州漢兒高藥師、僧即榮等以舟浮海，至文登岸。詔師中，募人同往探問以聞。

先是，政和元年，朝廷差童貫副鄭允中奉使。遼人有馬植者，潛見童貫于路。植燕京霍陰人，涉獵書傳，有口才，能文辭，長於智數。見契丹爲女真侵暴，邊害益深，盜賊蜂起，知契丹必亡，陰謀歸漢，說貫以邊事。是時童貫奉密旨使覘其國，於是約其來歸。植數上書奏，上喜，賜姓李、名良嗣。蔡京、童貫力主之，以圖取燕。時薛嗣昌、和詵、侯益揣知朝廷有意幽薊，並迎合附會，唱爲北事。和詵知雄州，以厚賂結納朔方豪雋，士多歸之，以收燕山圖來上。又中山守張杲、高陽關安撫吳玠亦獻議燕雲可取。河東經略薛嗣昌得河朔諜人之辭，往往潤色，以希禁密意，每陛對論及北事，輒請興師。嗣昌又委代州安撫王機，探伺遼人之隙，陳攻取之策。時武、應等州屢來投附，機悉接納。又有王師中全家來忻、代，上詔令師中知登州，以伺其事，然未有以發。會是年，登州以奏，有遼人舡二隻爲風漂達我駝基島，乃高藥師、曹孝才及僧即榮率其親屬老幼二百人，因避亂欲之高麗，爲風漂至州。具言，遼人以渤海變亂，因爲女真侵暴，女真軍馬與遼人爭戰累年，侵奪地土，已過遼河之西。今海岸以北，自蘇、復至興、瀋、同、咸州悉屬女真矣。登州守王師中具以奏聞。上命中使押詣蔡京第，令與童貫僉議。京、貫因同具奏，國初時女真常奉貢，而太宗皇帝屢詔市馬女真，其後始絕。今若不若降詔遵故事以市馬爲名，令人訪其事體虛實如何。上可之。詔登州守臣王師中，募人同高藥師等齎市馬詔，泛海以往探問。②其後通好女真，議舉兵相應，夾攻滅遼。國家禍變自是而始。

史料 12 『三朝北盟會編』卷一五、政和七年七月四日、宣和五年四月十一日所引「金人誓書」

維天輔七年歲次癸卯四月甲申朔八日辛卯，大金皇帝致書於大宋皇帝闕下。……

今承來書（＝宋からの誓書を指す），……兩界側近人戶，不得交侵。盜賊逃人，彼此無令停止。亦不得密切間諜，誘擾邊人。若盜賊并贓捉敗，各依本朝法令科罪訖，贓罰。賊雖不獲，踪跡到處，便勒留償。若有暴盜，或因別故，合舉兵衆，須得關報沿邊官司。兩國疆界，各令防守。兩朝界內地如舊，不得遮堵道路。至如將來殊方異域人使往復，無得禁阻。……

史料 13 『三朝北盟會編』卷一一、宣和四年十一月一日所引『燕雲奉使錄』

是日阿骨打令趙良嗣與蒲結奴議事。蒲結奴云，「去年本國專遣使臣理會恁大國情公事，屯着人馬，專專地等候回使相約打滅契丹。却留我使人，一住半年，滯了軍期，更不遣回使，只將空書令軍人送過海來，已是斷絕之意。此段休說，更說一段。且如夾攻，本國兵馬從今年正月已到中京，因甚不便來夾攻。本國自去年十一月出兵，今年正月到中京，三月到西京，已是半年，受了千辛萬苦，貴朝才於五月出兵，慢慢地占穩占姦，更說甚夾攻。此一段亦休說。皇帝有指揮，去年不遣使，乃是失信，今年雖出兵，亦不如約，便畫斷休說。而今特將已收下西京一路州縣與南朝，請先交割。外爲契丹昏主猶領殘兵，不先了了燕京，不惟爲金國之患，亦恐去南朝作過。皇帝已定親去收燕京，候收燕京了，却來商量。或與不與，在臨時。前遣元帥就近

代州議事，便是此意。已於王瓌處仔細道來，更不可改。」

**史料 14** 『三朝北盟會編』卷二二、宣和七年十一月十九日所引『茆齋自敘』

粘罕笑曰，「你家更無人可使，只委內官。山後地土元初許時，蓋爲大聖皇帝恩義，酬答趙皇海上交結之意，各立誓書，永遠和好。不謂大聖皇帝纔崩，輿櫬未及歸國，地土交受未了，貴朝早已違誓背約，陰納張覺，收接燕京逃去職官民戶，本朝累次追取，只是虛行文移。誇詫幅員萬里，國富民衆，本朝雖小，却不曾敢失理道。待與貴朝略辨曲直則箇。」

**史料 15** 『三朝北盟會編』卷四、宣和三年正月所引「金人國書」

正月日，大金皇帝致書于大宋皇帝闕下。適紆使傳，遙示音華，載詳別屬之辭，備形書外之意。事須審而後度，禮當具以先聞。昨者，趙良嗣等回，許與燕京并所管州鎮，書載若不夾攻，難應已許。今若更要西京，只請就便計度收取，如難果意，冀爲報示。有此所未言舉動的期。所有關封，決當事後。春令在始，善祝多祺。今差勃董曷魯、大迪烏充國信使副。有少禮物具諸別錄。專奉書，不宣。謹白。

**史料 16** 『三朝北盟會編』卷四、宣和二年十一月二十九日所引『茆齋自敘』

阿骨打一日集衆酋豪出荒漠打圍射獵。粘罕與某並轡，令譯者相謂曰，「我聞南朝人止會文章，不會武藝，果如何。」某答以，「南朝大國，文武常分兩階，然而武有兼深文墨，文有精曉兵務者，初不一槩言也。」粘罕云，「聞教論兵書及第，莫曉會弓馬否。」某答以，「武舉進士，取在義策，弓矢特其挾色耳。」粘罕遂取己所佩弓授某云，「且煩走馬開弓，願得略見南人射弓手段。」某遂策馬挽弓，作射物狀。粘罕愕然。馬行積雪中，雖晴日不消。至晚，阿骨打召某云，「聞南使會開弓，來日隨我射一物如何。」僕答以，「武舉射生非所長，容試射之，恐或有得。」翌早阿骨打設一虎皮坐雪上，授僕弓矢各一，其弓以皮爲弦。指一雪積，使某射之，再中其端。阿骨打笑曰，「射得曉好。南朝射者盡若是乎。」僕答以，「措大弓箭軟弱不堪，如在京，則有子弟所長入祗候、諸班直，天下禁軍、諸路大事藝人、及沿邊勇敢效用、弓箭手、保甲，彼乃武藝精強之人。如某特其小小者耳。」良久，阿骨打上馬，令大迪烏授某弓一，射生箭一，約云，「有獸起即射之。」行二里許，一黃驃躍起。阿骨打傳令云，「諸軍未許射，令南使先射。」某躍馬馳逐，引弓一發殲之。自阿骨打而下皆稱善。是晚，粘罕言，見皇帝說射得曉好，南使射中，和我心上快活。次日還館，大迪烏見先君語甚喜。

次日，阿骨打遣其弟韶瓦郎君齋貂裘、錦袍、犀帶等七件云，「南使能馳射，皇帝賜。」粘罕父撒垓相公者云，「南使射生得中，名聽甚遠，可立一顯名，今後喚作野力麻立。」譯云善射之人也。某隨打圍自來流河阿骨打所居指北帶東行約五百餘里，皆平坦草莽，絕少居民，每三五里之間，有一二族帳，每帳族不過三五十家。自過咸州至渾同江以北，不種穀麥，所種止稗子，舂米旋炊硬飯。遇阿骨打聚諸酋共食，則於炕上用矮檯子，或木盤相接，人置稗子飯一盃，加匕其上，列以藟菰、野蒜、長瓜，皆塩漬者。別以木櫟，盛猪、羊、雞、兔、狼、鹿、驢、鹿、鹿、狐、狸、牛、驢、犬、馬、鷲、鴈、魚、鴨、蝦、蟬等肉，或燂，或烹，或生爨，多以芥蒜汁漬沃，續供列，各取佩刀爨切薦飯。食罷，方以薄酒傳盃冷飲。謂之御宴者亦如此。自過殯、辰州、東京以北，絕少羊、麪，每晨及夕，各以射到禽獸薦飯，食畢上馬。每旦，阿骨打於積雪上以草薦一虎皮，背風而坐，前燎草木。率諸酋至，各取所別箭一隻擲占遠近，各隨所占，左右上馬，放所部軍馬單行。每騎相去五七步，接續不絕，兩頭相望，常及一二十里。候放圍盡，阿骨打上馬，去後隊一二里，立認旗行，兩翼騎兵，視旗進趨。凡野獸自內起外者，四圍得迎射，自外起內者，須主酋先射。凡圍如箕掌，徐進約三四十里，近可宿之處，即兩梢合圍漸促，須臾作三二十匝，野獸迸走或射或擊，盡斃之。阿骨打復設皮坐，撒火炙焰，或生爨，引酒一兩盃。騎散止宿。阿骨打嘗言，「我國中最樂，無如打圍。」其行軍布陣，大槩出此。

表 1：『三朝北盟会編』の年ごとに占める巻数（陳楽素 1936、199-201 頁より）

| 年 份                       | 所 佔 卷 數         | 所 在 卷 數 |
|---------------------------|-----------------|---------|
| 政和七年                      | $\frac{1}{3}$   | 1       |
| 政和八年 <small>并重和元年</small> | $1\frac{2}{3}$  | 1—2     |
| 重和二                       | 1               | 3       |
| 宣和元                       | 1               | 4       |
| ” ” 二                     | 1               | 4       |
| ” ” 三                     | $\frac{1}{5}$   | 4—5     |
| ” ” 四                     | $7\frac{4}{5}$  | 5—12    |
| ” ” 五                     | 6               | 13—18   |
| ” ” 六                     | 1               | 19      |
| ” ” 七                     | $6\frac{1}{2}$  | 20—26   |
| 靖康元                       | $47\frac{1}{2}$ | 26—73   |
| ” ” 二                     | 27              | 74—100  |
| 建炎元                       | $13\frac{1}{2}$ | 101—114 |
| ” ” 二                     | $5\frac{1}{2}$  | 114—119 |
| ” ” 三                     | 16              | 120—135 |
| ” ” 四                     | 8               | 136—143 |
| 紹興元                       | 6               | 144—149 |
| ” ” 二                     | 5               | 150—154 |
| ” ” 三                     | 2               | 155—156 |
| ” ” 四                     | 9               | 157—165 |
| ” ” 五                     | 3               | 166—168 |
| ” ” 六                     | 2               | 169—170 |
| ” ” 七                     | 12              | 171—182 |
| ” ” 八                     | 8               | 183—190 |
| ” ” 九                     | 8               | 191—198 |
| ” ” 一〇年                   | 6               | 199—204 |
| ” ” 一一                    | $3\frac{1}{3}$  | 205—208 |
| 紹興一二                      | $4\frac{2}{3}$  | 208—212 |
| ” ” 一三                    | 1               | 213     |
| ” ” 一四                    | 2               | 214—215 |
| ” ” 一五                    | 1               | 216     |
| ” ” 一六                    | 1               | 217     |
| ” ” 一七                    | 2               | 217—219 |
| ” ” 一八                    | $\frac{1}{32}$  | 219     |
| ” ” 一九                    | $\frac{7}{10}$  | 219—221 |
| ” ” 二〇                    | 2               | 221—224 |
| ” ” 二一                    | $2\frac{1}{2}$  | 224     |
| ” ” 二二                    | $\frac{1}{2}$   | 〇       |
| ” ” 二三                    | 〇               | 〇       |
| ” ” 二四                    | 24              | 225—248 |
| ” ” 二五                    | 2               | 249—250 |
| ” ” 二六                    |                 |         |
| ” ” 二七                    |                 |         |
| ” ” 二八                    |                 |         |
| ” ” 二九                    |                 |         |
| ” ” 三〇                    |                 |         |
| ” ” 三一                    |                 |         |
| ” ” 三二                    |                 |         |

表2：『三朝北盟會編』「政宣上帙」に見える主な記事一覧

| 年 月          | 記 事                                                                          | 巻 数       |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| 政和七年(1117)七月 | 遼の遼東漢人が宋の登州へ到来、女真の遼への叛乱、遼東の混乱を伝える。宋、登州より人を遣って調査に行かせるも失敗                      | 巻 1       |
| 政和八年(1118)八月 | 宋、馬政らを派遣、金の本拠地に到達、契丹挾撃を提案                                                    | 巻 2       |
| 重和二年(1119)正月 | 馬政が金の使者とともに都に到達                                                              | 巻 3       |
| 宣和元年(1119)三月 | 宋から使者を派遣するも、契丹と金との和平交渉の情報に接して途中で中止、軍卒呼延慶を派遣して登州の牒をもたらすのみ                     | 巻 4       |
| 宣和二年(1120)正月 | 呼延慶が宋へ帰国、遼金講和不成立を報告                                                          | 巻 4       |
| 同年三月         | 宋、使者趙良嗣らを派遣、契丹挾撃と燕雲故地割譲の密約、国書は持参せず                                           | 巻 4       |
| 同年七月         | 金、使者斯刺習魯らを派遣、国書持し、燕京割譲を認める                                                   | 巻 4       |
| 同年九月         | 宋、使者馬政らを派遣、国書・事目持し、契丹挾撃の期日を定め、山後の地を求め、歳幣の支払いを認める                             | 巻 4       |
| 宣和三年(1121)正月 | 金、使者曷魯らを派遣、国書持し、契丹挾撃を議す                                                      | 巻 4       |
| 同年五月         | 宋で方臘の乱発生。金使を登州に留めたあと、都へ到達                                                    | 巻 5       |
| 同年八月         | 宋、金使に国書を持たせ、使者を派遣せず                                                          | 巻 5       |
| 同年十一月        | 金、遼中京を攻略、遼の天祚帝は西へ逃れる                                                         | 巻 5       |
| 宣和四年(1122)三月 | 遼、耶律淳が燕京で即位                                                                  | 巻 5       |
| 同年四～六月       | 宋、宣撫使・副使の童貫・蔡攸が十万の大軍を率いて燕京に侵攻、种師道率いる軍が遼将大石林牙の迎撃を受けるなど大敗して退却                  | 巻 5・6・7・8 |
| 同年五月         | 金、雲中を攻撃し、皇帝阿骨打が西へ進軍するなかで宋へ使者徒姑旦烏歇らを派遣、国書持参、金軍の中京・西京攻略と天祚帝追捕を通知、断絶していた交渉を再開   | 巻 7       |
| 同年六月         | 遼、耶律淳死す                                                                      | 巻 9       |
| 同年八月         | 宋、劉延慶を派遣して再度出兵                                                               | 巻 9       |
| 同年九月         | 宋、金使を厚遇、使者趙良嗣らを派遣、徽宗親筆の国書を持し、契丹挾撃を議す                                         | 巻 9       |
| 同年九月         | 遼の燕京政権、蕭后が宋に表を奉じて臣を称す。宋、これを受けて燕京を燕山府に改める                                     | 巻 10      |
| 同年九月         | 遼の郭藥師が宋に帰附、涿州・易州が宋に降る                                                        | 巻 9・10    |
| 同年十月         | 宋、劉延慶・郭藥師の軍、燕山に侵攻、契丹軍に大敗して退却                                                 | 巻 11      |
| 同年十月         | 宋使、金の阿骨打のいる奉聖州に至る。金は燕京および管下の6州24県の割譲を認め、契丹と同額の歳幣のほか様々な要求（金は宋軍の燕京での度重なる敗北を把握） | 巻 11      |
| 同年十一月        | 金、使者李靖らを派遣、国書持して到来。宋、使者趙良嗣ら派遣、国書持し、燕京の阿骨打のもとへ向かう。契丹と同額の歳幣を認め、再度西京・平州一帯を要求    | 巻 11      |

|              |                                                                                                      |         |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|
| 同年十二月        | 阿骨打率いる金軍、居庸関を越え、燕京に入城                                                                                | 巻 12    |
| 同年十二月        | 宋使、燕京に至る。金は宋の西京・平州一帯の要求を許さず、独力で燕京を攻略したことにより燕地の税賦を要求、使者李靖らを派遣、国書持参                                    | 巻 12    |
| 宣和五年(1123)正月 | 金使到来、燕地税賦をめぐる協議、銀絹に代えて送ることを認める。宋、使者趙良嗣らを派遣、国書持参                                                      | 巻 13    |
| 同年正月         | 宋使、燕京に至る。金、燕地税賦に代わる銀絹について、歳幣とは別に百万貫を要求。趙良嗣、雄州に戻り急ぎ金の国書を送付                                            | 巻 13    |
| 同年二月         | 宋、朝廷より特急便で国書と御筆を雄州へ送り、燕地税賦百万貫と銀絹を送ることを認め、再度西京の割譲を要求。趙良嗣ら、燕京に至る。金は阿骨打の一存で西京（雲中）一帯の割譲を認め、代わりに軍兵への賞賜を要求 | 巻 14    |
| 同年二月         | 金、使者寧朮割（＝銀朮哥）らを派遣、国書とともに誓書の草案を持参。誓書と国書の検討、西京割譲の代償に緑罽二千栲栳、金軍士卒の賞賜要求                                   | 巻 14    |
| 同年三月         | 宋、使者趙良嗣らを派遣、国書と誓書を持参。金側の要求による徽宗直筆誓書の書き直しを経て、燕山・雲中割譲の期日を協議                                            | 巻 15    |
| 同年四月         | 金、使者楊璞らを派遣、雄州で宣撫司より燕京の旧遼官僚趙温信の身柄引き渡し。金、燕山割譲期日を決定、再度使者楊璞らを派遣、国書と誓書を持参、誓書の交換が成って金宋間盟約が成立               | 巻 15    |
| 同年四月         | 金より宋へ燕山割譲、燕山富戸は金へ引き渡し。童貫・蔡攸率いる宋の宣撫司軍が燕山に入城                                                           | 巻 15・16 |
| 同年四月         | 宋、童貫が燕地を収復したことを上奏。河東・河北・燕山・雲中路に曲赦                                                                    | 巻 16    |
| 同年五月         | 宋、燕山収復の一連の祝賀行事と褒賞をおこなう                                                                               | 巻 17    |
| 同年五月         | 平州の張覚が金に叛き、燕京の宰相左企弓らを殺害                                                                              | 巻 17    |
| 同年六月         | 郭藥師が宋に来朝                                                                                             | 巻 17    |
| 同年六月         | 平州張覚、宋の宣撫司に至って土地を納める（宋に帰附）。金軍、平州を攻撃するが、張覚これを退ける                                                      | 巻 18    |
| 同年六月         | 金、阿骨打が亡くなる                                                                                           | 巻 18    |
| 同年七月         | 金、幹離不（宗望）が平州を包囲、張覚が逃亡、宋の朝廷が賜った詔書がすべて金人に奪われる                                                          | 巻 18    |
| 同年八月         | 宋、宣撫司の上奏、奚の蕭幹を破る                                                                                     | 巻 18    |
| 同年九月         | 金、幹離不が平州を攻め落とす。張覚の引き渡しを要求された宋、その首を献ずる                                                                | 巻 18    |
| 宣和六年(1124)正月 | 金より宋の朝廷へ阿骨打の訃報が届く                                                                                    | 巻 19    |
| 同年正月         | 蕭幹の首と遼の玉檢・金印が宋の朝廷に届く                                                                                 | 巻 19    |
| 同年四月         | 金、幹離不が宋に粟二十万石を要求                                                                                     | 巻 19    |

|              |                                                                                            |         |
|--------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|---------|
| 同年八月         | 金、蔚州・飛狐・靈丘県を陥れる                                                                            | 巻 19    |
| 同年八月         | 宋、河北燕山府路宣撫使として譚檣に代わり童貫を再起用                                                                 | 巻 19    |
| 同年八月         | 宋、燕山収復を祝って天下に大赦                                                                            | 巻 19    |
| 同年十一月        | 宋、童貫が馬括らを雲中の粘罕（宗翰）のもとへ派遣、雲中の割譲について議す                                                       | 巻 19    |
| 宣和七年(1125)正月 | 宋、許亢宗を金の新帝呉乞買の即位を祝賀する使者として派遣                                                               | 巻 20    |
| 同年正月         | 金、粘罕が雲中で遼の天祚帝を捕縛、朝廷へ護送（遼の滅亡）。これを宋の宣撫司に報ず                                                   | 巻 21    |
| 同年二月         | 宋、童貫が耶律氏滅亡を祝賀する表文をたてまつる                                                                    | 巻 21    |
| 同年五月         | 宋、燕山収復の功績により童貫を広陽郡王に封ずる                                                                    | 巻 22    |
| 同年七月         | 金、天祚帝を捕えたことを知らせる告慶使を宋へ派遣                                                                   | 巻 22    |
| 同年九～十一月      | 宋の北辺より金の粘罕らの南征にむけた動きが報告される                                                                 | 巻 22    |
| 同年十一月        | 宋、馬括らを雲中の金粘罕の軍前に派遣、蔚州・応州の割譲を議し、粘罕に南侵の意があるかを探らせる。粘罕、張覚を匿うなどした宋の盟約違反を詰り、用兵を明言。馬括、太原の童貫のもとへ報告 | 巻 22・23 |
| 同年十一月        | 金、斡离不が平州より燕山境内に侵攻                                                                          | 巻 22・23 |
| 同年十一月        | 宋、安肅・保信軍を廃止                                                                                | 巻 23    |
| 同年十二月        | 金、粘罕が太原の宣撫司（童貫）へ使者派遣して出兵を通告するとともに、雲中より南へ侵攻。朔州・武州・代州・忻州より石嶺関を抜き、太原を包囲                       | 巻 23・25 |
| 同年十二月        | 宋、童貫が太原より逃亡                                                                                | 巻 23    |
| 同年十二月        | 金、斡离不が燕山を攻略。郭藥師は常勝軍を率いて金に投降、斡离不軍の先鋒となる                                                     | 巻 23・24 |
| 同年十二月        | 宋、徽宗が己を罪する詔を発し、天下に直言（意見書）を求める。花石綱をやめる御筆手詔を下す                                               | 巻 25    |
| 同年十二月        | 宋、徽宗が南幸を謀り、皇太子に内禅（譲位、欽宗即位）                                                                 | 巻 25    |

## 北宋最強軍団とその担い手たち：澶淵の盟から靖康の変へ

伊藤一馬（大阪大学大学院文学研究科・招へい研究員）

### はじめに

#### (1) 北宋と 10～12 世紀のユーラシア東方情勢【地図 1; 地図 2】

##### ・北宋の成立と「中国」の再統一

960 年：五代後周の禁軍司令官・趙匡胤（太祖）が禅譲を受けて宋王朝（北宋）成立

979 年：2 代目太宗が唐末以来の中国の分裂状態を解消・統一

→「中国」再統一後、ユーラシア東方情勢への対応という課題に直面

##### ・中央ユーラシア型国家（征服王朝）の時代

遊牧民・狩猟民の軍事力を基盤としつつ農耕地帯も長期的に支配

ユーラシアの東西に亘って林立し国際情勢において優位に

※ユーラシア東方では契丹・女真（金）・西夏・モンゴル帝国 etc.

##### ・盟約の時代

10 世紀以降、諸勢力間で“盟約”に基づく外交関係

→国境の画定、相互不可侵、使節の往還、交易場の開設 etc.

澶淵の盟（1004 年）に基づく契丹—北宋関係が基軸＝澶淵体制

##### ・北宋の対外情勢とその変遷

基本構図：契丹（北方）、タングート（西北方）、ベトナム（南方）への対応

→軍事衝突と盟約締結による情勢の推移

→三勢力への軍事的・外交的な対応が重要政策

→前線には大量の軍事力を配備＝「軍事大国」としての北宋

澶淵の盟：1004 年に契丹—北宋間で成立、約 120 年に亘る“平和共存”を現出

→契丹—北宋関係を基軸としたユーラシア東方情勢＝澶淵体制

靖康の変：北宋靖康元年（1126 年）閏 11 月、金軍による攻城戦の末、開封陥落

→翌 4 月、欽宗・徽宗や宗室百官が金軍により拉致・連行、北宋滅亡

→5 月、難を逃れた欽宗の弟・趙構が応天府で即位（高宗）、南宋成立

⇒澶淵の盟による安定と靖康の変による激動

#### (2) 『三朝北盟会編』と靖康の変

##### ・『三朝北盟会編』：欽宗・徽宗・高宗の 3 代を対象とする史書

；靖康の変前後の情勢の変動を生々しく描写

；各地の軍事情勢、対金防衛戦の克明な記録

##### ・西兵：12 世紀の対契丹、対金戦争に動員された軍団として頻繁に登場

→西兵軍団の敗北により開封陥落、靖康の変へ

＝西兵は北宋の命運を左右した“命綱”，“最後の砦”

※西兵：西夏に対応する西北方面に展開していた軍団≠特定の部隊などの名称

◎本講演の目的：北宋滅亡の理由を軍事・戦争に着目して探る

- ・なぜ西兵は北宋の命運を左右する存在になったのか？＝長期的な背景  
→北宋の軍事・対外情勢の展開，軍事行動の担い手たちに着目
  - ・なぜ西兵は敗北して開封陥落や靖康の変を招いたのか？＝短期的な要因  
→徽宗・欽宗期の軍事情勢に注目
- ⇒近年の北宋軍事史研究の成果や文書・碑刻史料などを紹介しながら検討

## 1. 北宋の軍事・外交情勢とその変遷

○北宋の対外情勢：大きく4期に区分【系図参照】

|          | 北方：対契丹（＋金） | 西北方：対タングート  | 南方：対ベトナム |
|----------|------------|-------------|----------|
| 成立～11世紀初 | 軍事衝突～澶淵の盟  | 李繼遷独立～李繼遷戦死 | ベトナムへの進攻 |
| 11世紀半ば   | 増幣交渉       | 宋夏戦争～慶暦の和約  | 儂智高の乱    |
| 11世紀後半   | 国境交渉       | 対西夏積極政策     | 宋越戦争     |
| 12世紀初～滅亡 | 契丹滅亡，靖康の変  | 西夏軍の侵攻      | （方臘の乱）   |

### (1) 北宋成立～11世紀初頭：太祖・太宗・真宗期

- ・960年に北宋成立，979年に「中国」再統一を達成  
→契丹との軍事衝突，タングートの叛旗・征討失敗，ベトナムへの遠征失敗  
→北方，西北方，南方で軍事・外交的緊張が同時期に発生，北宋は劣勢・失敗  
⇒11世紀初頭に三方の緊張が緩和，三方への対処が北宋の対外情勢の基本構図へ  
※対契丹：澶淵の盟，対タングート：李繼遷の死亡と和議，対ベトナム：朝貢と冊封

### (2) 11世紀半ば（1030～50年代）：仁宗期

- ・西北：1038年，タングートの李元昊が皇帝即位，西夏建国を宣言  
→北宋へ侵攻，宋夏戦争の勃発，慶暦の和約（1044年）
- ・北方：契丹との国境交渉，増幣交渉→歳幣の増額
- ・南方：宋越境界地帯で儂智高の乱が勃発，儂智高の処遇をめぐり大越とも緊張

### (3) 11世紀後半（1070～1100年）：神宗・哲宗期

- ・西北：対西夏積極策の推進，大規模な軍事行動，領域拡大
- ・北方：契丹との国境交渉，西夏との和議交渉へ契丹が介入
- ・南方：宋越戦争が勃発し大越が北宋に侵攻，北宋はハノイまで反撃するも撤退

### (4) 12世紀初～北宋滅亡：徽宗・欽宗期

- ・西北：対西夏積極策，領域拡大政策の継続，金の南進に呼応した西夏軍の侵攻
- ・北方：金の勃興と契丹挾撃作戦，契丹の滅亡，金の南進と靖康の変
- （・南方：浙江で方臘の乱が勃発）

◎澶淵の盟成立によって最大の脅威であった契丹との軍事衝突は北宋末まで回避

→その後，西夏に対する西北方面での頻繁な軍事行動＝軍事重心の西北への移動

## 2. 北宋の軍事基盤：軍事力の担い手と供給源

### (1) 北宋初期：河北・山西出身者と遊牧系集団

- ・ 軍事行動のパターン：都部署（＝指揮官）が率いる行営の編制  
※行営：一時的に編制される遠征軍・征討軍＋常駐して防衛を担うように  
；中央や前線に駐屯する部隊から編制
- ・ 都部署の任用：非漢人・遊牧系の武人や河北・山西地域の出身者  
慕容延釗：吐渾（吐谷渾）      楊承信：沙陀      米信・党進：奚  
何繼筠・安守忠：ソグド系突厥      楊業：沙陀？      石守信・曹彬：ソグド？
- ・ 禁軍の部隊：非漢人・遊牧系集団を組織？  
契丹直，帰明渤海，吐渾小底，吐渾直，安慶直，三部落，擒戎 etc.

【資料 1】定州市博物館蔵宋代石函：河北定州に駐屯する「吐渾」の部隊  
吐渾第三指揮使，吐渾第五副指揮←指揮：500 人から成る部隊  
米・安・史・何・康姓：ソグド系

◎河北・山西：唐末五代以来の戦乱／遊牧集団が流入する農牧接壤地帯

◎北宋の最重要課題：契丹対策，実際の戦場は河北，山西

### (2) 北宋中期以降：西北地域と西兵軍団

- ・ 澶淵の盟締結後，契丹との軍事的緊張の緩和  
⇔宋夏戦争の勃発による西夏との軍事的緊張の増大
- ・ 現地（西北地域）出身者の軍事動員  
就糧禁軍：現地に駐屯して軍糧調達を行う禁軍  
郷兵：禁軍とは別に現地で動員，禁軍への昇格もあり  
弓箭手：屯田兵のような性格を有する郷兵の一種，特に勇猛で知られる  
蕃兵：北宋に帰順したタングート系・チベット系集団（＝熟戸）から編制

【資料 2】「宋西北辺境軍政文書」109-101 文書

時期：建炎二年（1128）

内容：<sup>かめい</sup> 乱名族・小胡族などの騎兵・歩兵の数を報告

【資料 3】延安志丹県<sup>か か か</sup>何家塬石窟の題記銘文

時期：紹聖二年（1095） ※石窟は元祐八年（1093）～紹聖二年に造営

内容：小胡族首領の吃多遇らによる造窟，仏像の奉納

⇒小胡族：チベット系 or タングート系の熟戸・蕃部集団

→宋代の<sup>ふえん</sup>鄜延路保安軍（陝西省延安市志丹県）徳靖寨付近に散居

※保安軍徳靖寨：対西夏最前線の重要な軍事拠点

屈慙・吃多遇，二十四指揮：首領・リーダーによる管轄，軍事力の供出

- ・ 指揮官：タングート・チベット系の蕃将や西北地域の出身者

数世代に亘る武将一族：种氏，姚氏，呉氏，折氏

タングート系熟戸：劉延慶・劉光世父子

◎西北地域：対西夏軍事前線／タングート・チベット系集団が散居

◎北宋の軍事的重心：契丹に対する河北・山西から西夏に対する西北地域へ

〔補足①〕黒水城出土「宋西北辺境軍政文書」【地図 3; 地図 4】

ロシア科学アカデミー東方文献研究所所蔵，109 点から成る宋代文書群

年代：1118～1131 年（特に 1125～1128 年）＝北宋最末期～南宋最初期

内容：ほぼ全てが対西夏前線の鄜延路における軍事関連

伝来：鄜延路第七将の官司に保管 ※「将」：各路に複数設置された軍事単位，軍政機関

→金の占領後に西夏へ流入（反故紙として廃棄後，交易品として？）

→西夏文字の字書の印刷に再利用，黒水城へ

⇒宋代西北地域の軍事情勢を知る貴重な史料群

〔補足②〕宋代陝北地域の石窟寺院と題記銘文【地図 6】

11～12 世紀に陝北地域で造営・重修された石窟寺院

宋金代，明代の題記多数

将兵，百姓，蕃部（チベット or タングート系）による造営や仏像の奉納

⇒11～12 世紀の造窟ブーム

《背景》北宋－西夏の軍事衝突激化による精神の拠り所，英霊供養

宋・金皇帝への吉祥句，亡父母の浄土往生祈願，自己の立身出世

経済的に潤沢な資金，経済的な好況？

### （3）西兵軍団の軍事動員

- ・儂智高の乱：宋夏戦争で活躍した狄青<sup>てきせい</sup>と西兵軍団を派遣して鎮圧

『宋会要輯稿』兵 10，討叛，儂智高，仁宗皇祐四年（1052）九月

四年九月，乃命宣徽南院使・彰化軍節度使狄青為荊湖南路宣撫使・都大提挙広南經制賊盜事。以延州東路都巡檢使孫節・涇原路都監竹島為荊湖南北路駐泊都監，安肅軍駐泊都監時明移邵州，權霸州駐泊都監王用，定州軍城寨監押何貴，定州都總司指使李守恩并為押隊指使，皆青所請也。詔兩路將佐并從青節制也。

- ・宋越戦争：趙構<sup>ちようせつ</sup>・李憲・燕達らを派遣して安南道行營を編制

＋陝西・河東から多数の将官や弓箭手・蕃兵を派遣

『続資治通鑑長編』卷 272，神宗熙寧九年（1076）正月庚午

庚午，命皇城使・涇原路鈐轄姚兕，引進副使・熙河路鈐轄李浩，右驍騎副使・秦鳳路都監・兼知甘谷城・兼第三將張之諫，内蔵庫副使・權發遣通遠軍 楊萬，左蔵庫副使・權環慶路都監・兼第三將雷嗣文，鄜延路都監・兼副將呂真，供備庫副使・環慶路都監・兼第四將李孝孫，内殿承制・鄜延路都監・兼副將曲珍，閤門祇候・權發遣豊州 張世矩，内殿承制・河北第二十將狄詳，西頭供奉官・閤門祇候・京西第四副將管偉，河東第七副將王慥，並充安南行營將副，仍令招討司以見今差定軍馬分擘統領，其旧將副且於駐兵州軍管勾訓練。

- ◎北宋の軍事基盤：北宋期を通じて、農牧接壤地帯および遊牧民を含む在地集団  
→対外情勢の変遷に応じて河北から西北へと基盤が移動  
→西北戦線で続く軍事的緊張の中で“唯一頼れる軍事力”へ

### 3. 靖康の変と西兵

#### (1) 靖康の変前後の金宋関係

- ・金宋“海上の盟”
  - 1115年：阿骨打が即位して大金国成立，契丹に叛旗
  - 1120年：度重なる金－宋間の交渉の末に“海上の盟”が成立，契丹挟撃へ
- ・燕京攻撃
  - 1121年：金軍が契丹を攻撃，翌正月に中京陥落
  - 1122年：4月，北宋の童貫らが燕京へ進軍するも敗退
    - 6月，再度燕京を攻めるも大敗
    - 金軍が燕京を攻略，燕京一帯を北宋に割譲
- ・第一次南伐
  - 1125年：10月，北宋の背反行為により金軍が南伐を敢行
    - 河北・山西の二方面から開封へ向けて進軍
    - 河北：燕京（燕山府）陥落
    - 山西：太原の頑強な抵抗
  - 1126年：正月，金の河北方面軍が開封に到達・包囲
    - 徽宗が退位，銀絹貢納や太原などの割譲を条件に和議，金軍撤退
- ・第二次南伐，靖康の変
  - 1126年：8月，北宋の背盟により再度金軍が南伐へ
    - 河北・山西方面軍が合流して開封に到達，包囲攻城戦
    - 閏11月，開封が陥落
  - 1127年：4月，金軍が徽宗・欽宗や宗室百官を拉致＝靖康の変（北宋滅亡）

#### (2) 西兵軍団の動向

- ・北宋徽宗期の西北軍事前線
  - 童貫が陝西・河東・河北宣撫使として軍事を統轄
    - 西夏や青唐吐蕃との抗争，領域の拡大
- ・金との海上の盟成立後，燕京攻撃に童貫率いる軍団を投入
  - 『三朝北盟会編』巻6，徽宗宣和四年（1122）五月十三日  
童貫至河間府分軍。
    - 貫至河間府，分雄州・広信軍為東西路，以种師道総東路兵，屯白溝。王稟将前軍，楊惟忠将左軍，种師中将右軍，王坪将後軍，趙明・楊志将選鋒軍。辛興宗総西路之衆，屯范村。楊可世・王淵将前軍，焦安節将左軍，劉光国・冀景将右軍，曲奇・王育将後軍，吳子厚・劉光世将選鋒軍，並聽劉延慶節制。
    - 童貫に加え，种師道・种師中・劉延慶・劉光世らの参陣
    - ※燕京占領時：楊可世が「陝西諸道兵三十萬」を擁す〔『三朝北盟会編』巻16〕

・南伐への対応【地図 5】

開封の救援に各地から勤王軍が参集

『三朝北盟会編』巻 30, 欽宗靖康元年（1126）正月二十日条

京畿河北路制置使种師道及統制官姚平仲，以涇原・秦鳳路兵至京師。

統制馬忠以勤王兵至京師。熙河路經略使姚古，秦鳳路經略使种師中，及折彥質・折可求・劉光国・楊可勝・范瓊・李宝諸路勤王兵，至京師。

太原の救援に勤王軍や陝西・河東の兵力を動員

→8 か月に及ぶ攻城戦の末，9 月に太原陥落

⇒太原の陥落：北方の交通・軍事上の要衝の喪失，開封と西北地域の分断

※金側の認識：北宋の西兵を警戒，山西方面への進軍は西兵への牽制

『三朝北盟会編』巻 23, 徽宗宣和七年（1125）十一月二十八日条

二十八日乙未，韓离不陷薊州，執奉使賀允中鎖之，副使武漢英髡而降。

北征紀実曰，…（中略）…（漢英）乃径走闕下，具以虜情告朝廷曰，金人之謀深矣。

謂中国独西兵可用。今以粘罕一軍下太原取洛陽，要絶西兵援路，且防天子幸蜀。韓离不一軍下燕山取真定，直掩東都，乃会於東都，而後不遜也。

（下線部訳）

〔金人が言うには〕中国（＝宋）で使いものになるのは西兵だけである。いま粘罕（＝金将）

の一軍に太原を攻略し洛陽を奪取させれば，必ず西兵の〔開封へ向かう〕援軍の道を断ち，さらに天子（＝徽宗）が蜀の地へ逃れることを防ぐことができよう。

・御前会合軍馬勤王入援所の組織

開封救援のために陝西全域に動員

『三朝北盟会編』巻 64, 欽宗靖康元年（1126）十一月二十二日条

永興軍路經略安撫使范致虛，被受聖旨総六路帥臣応援勤王。

范致虛が開封陥落の報を受けて開封救援軍の糾合

『建炎以来繫年要録』巻 1, 高宗建炎元年（1127）正月甲寅条

甲寅，陝西宣撫使范致虛以勤王兵次華州。初，西道都統王襄既南走，淵聖皇帝擢水部員外郎孫昭遠為秘閣修撰・西道副総管〔去年十一月乙亥〕。昭遠以三騎出国門，道招潰卒，得数百人，由南陽入商洛，遂至京兆。会陝西制置使錢蓋兵潰，致虛檄諸路，合兵勤王，昭遠督之，詞氣慷慨，聞者感動。於是，環慶經略使王似・熙河經略使王倚各以兵来会。而涇原經略使席貢・秦鳳經略使趙点・鄜延經略使張深皆不至。昭遠凡二十八疏劾之，貢竟不行，点纔遣将官李安領兵入援。

→“御前会合軍馬勤王入援所”と自称，開封救援のために進軍

※「宋西北辺境軍政文書」にみえる御前会合軍馬勤王入援所

義兵・敢勇・効用兵・弓手・弓箭手・蕃兵らの動員を確認

⇨西夏への警戒もあり足並み揃わず，金軍の迎撃により壊滅

※金の南伐に呼応して西夏軍が河東・陝西各地に侵攻

⇒御前会合軍馬勤王入援所の敗北：西北地域からの勤王の道が絶たれる

- ・方臘の乱：燕京攻撃に動員予定の童貫麾下の西兵軍団を派遣

『三朝北盟会編』巻5，徽宗宣和三年（1121）二月十七日

先是，女真往来議論，皆主童貫，以趙良嗣上京阿骨打之約，欲便舉兵応之故，選西京宿将会京師。又詔環慶・鄜延軍与河北禁軍更戍。会方臘叛，貫以西兵討賊，朝廷罷更戍指揮，登州守臣以童貫未還，留曷魯等不見遣。…（後略）

『宋会要輯稿』兵10，討叛，方臘，徽宗宣和二年（1120）十二月二十一日

二十一日，詔童貫為江淮荆浙等路宣撫使，譚稹為制置使，王稟為統制，將兵討之。同日，令樞密院起東南兩將〔第一將・第七將〕，京畿一將〔第四將〕前去捉殺，內將副如不係曾經戰陣人，日下差人抵替其軍兵，仍差曾經陝西出戍人。於是，陝西六路漢蕃精兵，同時俱南下，辛興宗・楊惟忠統熙河兵，劉鎮統涇原兵，楊可世・趙明統環慶兵，黃迪統鄜延兵，馬公直統秦鳳兵，冀景統河東兵，劉延慶都統制諸路軍馬。

◎12世紀の西兵軍団：対西夏前線～方臘の乱鎮圧～燕京攻撃，対金防衛

→各地の戦線を転戦，西兵の酷使・疲弊の末に北宋滅亡

【資料4】「宋西北辺境軍政文書」109-87 文書

童貫麾下の西兵軍団に属する「仕千」：燕山府（燕京）攻めへ従軍  
論功行賞が行われていないことを申し立て

おわりに

(1) 北宋最強の“西兵”軍団

- ・澶淵の盟以後，対西夏（西北）前線地域の軍事的重要性の高まり  
→軍事力の供給源としての西北地域，北宋最強軍団としての西兵軍団
- ・対西夏戦線のみならず北方，南方戦線へも動員  
→北宋の軍事行動を広く支える存在
- ・靖康の変：各地を転戦して疲弊した西兵軍団の敗戦により滅亡

《北宋滅亡の要因》

長期的背景：西北地域の軍事的重要性の高まりと依存

短期的要因：西兵に依存した方臘の乱討伐，回避できなかった二面・三面作戦

(2) 西兵のその後

- ・高宗のもとへ合流，南宋中央政府の御前軍として軍事基盤を形成  
→抗金四大武将のうち劉光世・張俊・韓世忠は西北地域の出身
  - ・西北地域での軍備再編：御前会合軍馬入援所壊滅後に逃亡兵を収容  
→西北地域を維持しつつ曲端・張浚のもとで金・西夏に対応  
→紹興和議後，四川呉氏一族のもとで防衛線を形成
- ⇒南宋の軍事的基盤としても存在感

◎西兵：北宋150年の根幹を支えた軍事基盤＋南宋の軍事基盤としても継承

⇒10～12世紀におけるユーラシア東方情勢を維持せしめた一端

## 参考文献案内

### 《一般書・概説書》 ※年代順

- 妹尾達彦 2001『長安の都市計画』（講談社選書メチエ）講談社。  
杉山正明 2005『疾駆する草原の支配者：遼西夏金元』（中国の歴史 08）講談社。  
森安孝夫 2007『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史 05）講談社。（講談社学術文庫版：2016 年）  
荒川慎太郎・澤本光弘・高井康典行・渡辺健哉（編）  
2013『契丹〔遼〕と 10～12 世紀の東部ユーラシア』（アジア遊学 160）勉誠出版。  
森部豊 2013『安祿山：「安史の乱」を起こしたソグド人』（世界史リブレット人）山川出版社。  
廣瀬憲雄 2014『古代日本外交史：東部ユーラシアの視点から読み直す』（講談社選書メチエ）講談社。  
妹尾達彦 2018『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部。  
古松崇志・白杵勲・藤原崇人・武田和哉（編）  
2019『金・女真の歴史とユーラシア東方』（アジア遊学 233）勉誠出版。  
古松崇志 2020『草原の制覇：大モンゴルまで』岩波書店。

### 《専門論文・著書》 ※著者五十音順

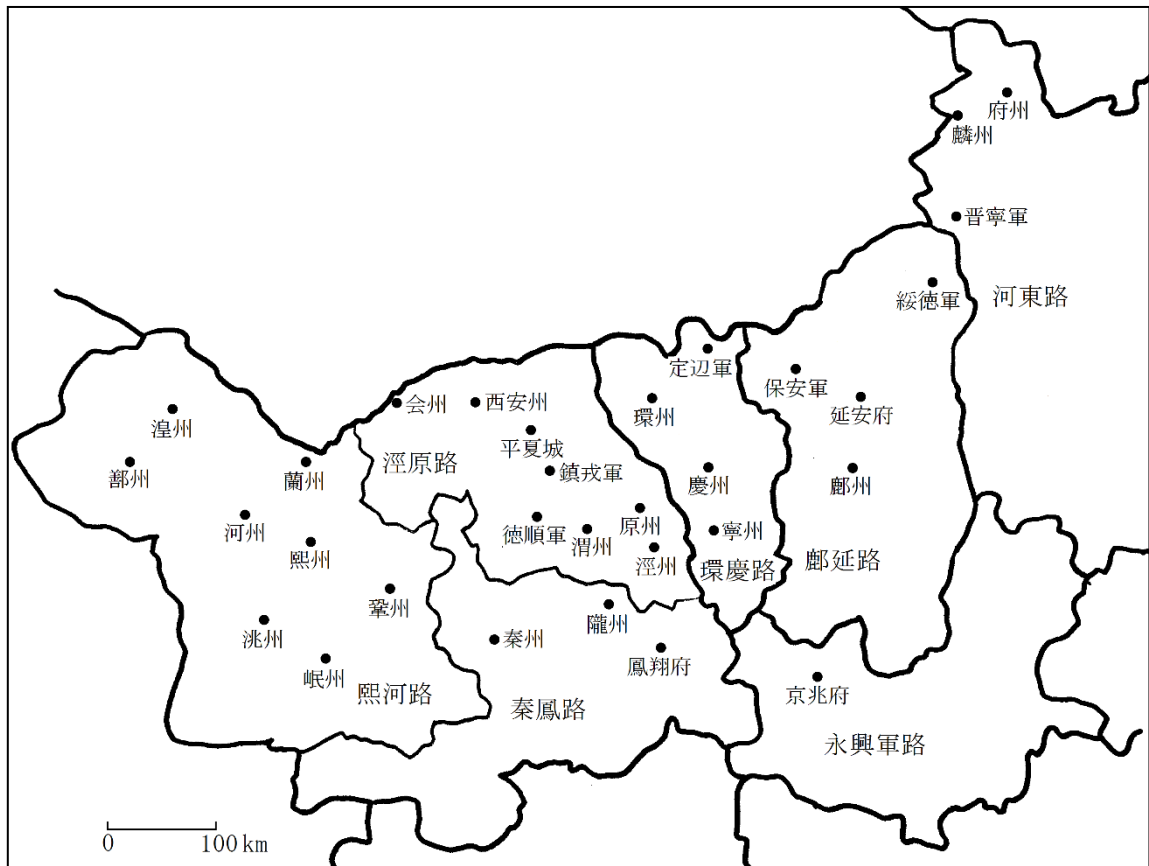
- 赤木崇敏 2012「宋代「検文書」攷：「宋西北辺境軍政文書」の性格」『大阪大学大学院文学研究科紀要』52。  
赤木崇敏 2018「文書・石窟題記より見る 12 世紀オルドスのタングート系集団：城台石空寺題記調査報告」  
村井恭子（研究代表）『文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造』平成 27～29  
年度科学研究費補助金（基盤研究 C）成果報告書，神戸大学。  
伊藤一馬 2012a「南宋成立期の中央政府と陝西地域：「宋西北辺境軍政文書」所見の赦書をめぐって」『東方  
学』123。  
伊藤一馬 2012b「黒水城出土「宋西北辺境軍政文書」：概要と研究状況」『内陸アジア言語の研究』27。  
伊藤一馬 2018「「宋西北辺境軍政文書」に見える宋代文書書式とその伝達：宋代文書体系の復元に向けて」  
『大阪大学大学院文学研究科紀要』58。  
伊藤一馬 2018「北宋期のオルドス地域とその軍事的意義」村井恭子（研究代表）『文物考古資料による唐～  
宋代オルドス地域の歴史的構造』平成 27～29 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）成果報告  
書，神戸大学。  
伊藤一馬 2019「北宋太祖・太宗期の内外軍事情勢と軍事指揮官：都部署を中心に」『大阪大学大学院文学研  
究科紀要』59。  
石見清裕 2015「中国・山西太原の政治文化的背景：旧太原城の自然・交通・地政学的位置」新川登亀男（編）  
『仏教文明と世俗秩序：国家・社会・聖地の形成』勉誠出版。  
金成奎 2000『宋代の西北問題と異民族政策』汲古書院。  
佐藤貴保・赤木崇敏・坂尻彰宏・呉正科  
2007「漢藏合壁西夏「黒水橋碑」再考」『内陸アジア言語の研究』22。  
鄒笛 2019「北宋末の太原戦役の再考：北宋滅亡の軍事過程について」『東洋学報』101-2。  
孫繼民 2009『俄藏黒水城所出《宋西北辺境軍政文書》整理与研究』北京：中華書局。  
村井恭子 2018「唐末五代オルドス・河東の党項・吐谷渾関係石刻史料」村井恭子（研究代表）『文物考古資  
料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造』平成 27～29 年度科学研究費補助金（基盤研究  
C）成果報告書，神戸大学。  
森部豊 2010『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部。  
尤東進 2012「北宋禁軍における「異族兵」について」『史滴』34。



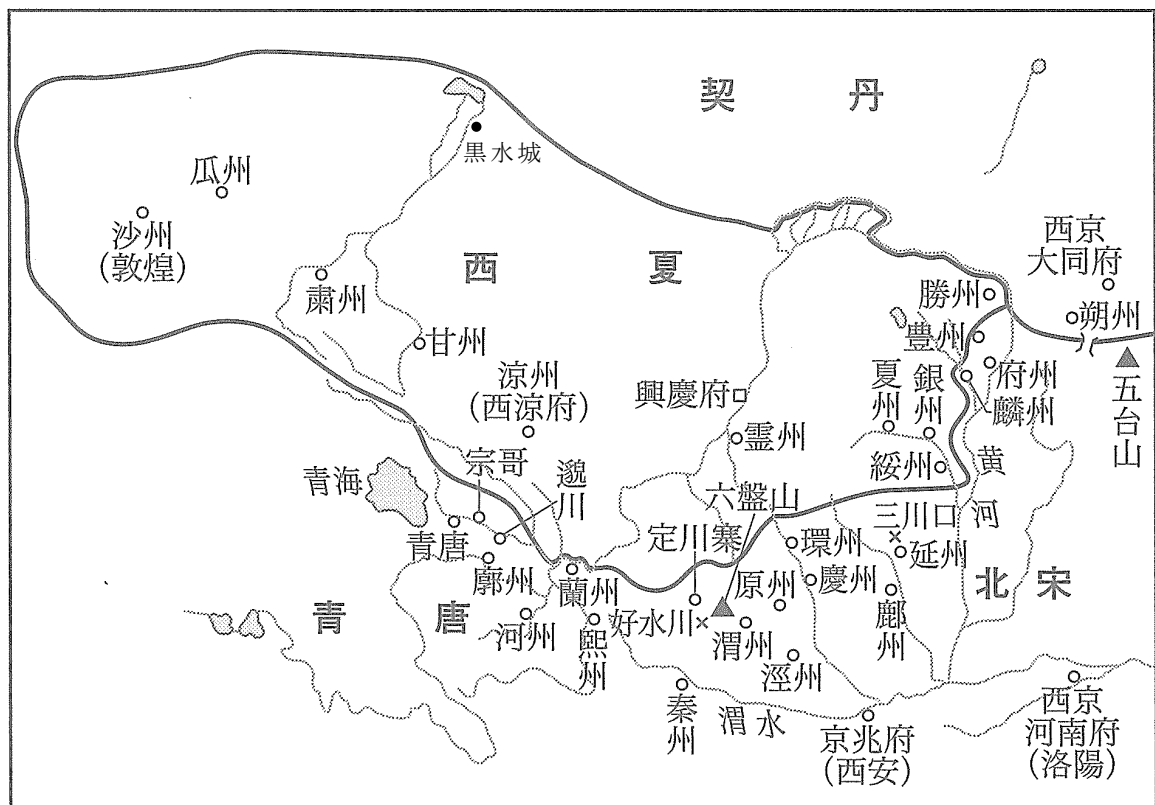
【地図 1】北宋期のユーラシア東方 [古松 2020, 129 頁]



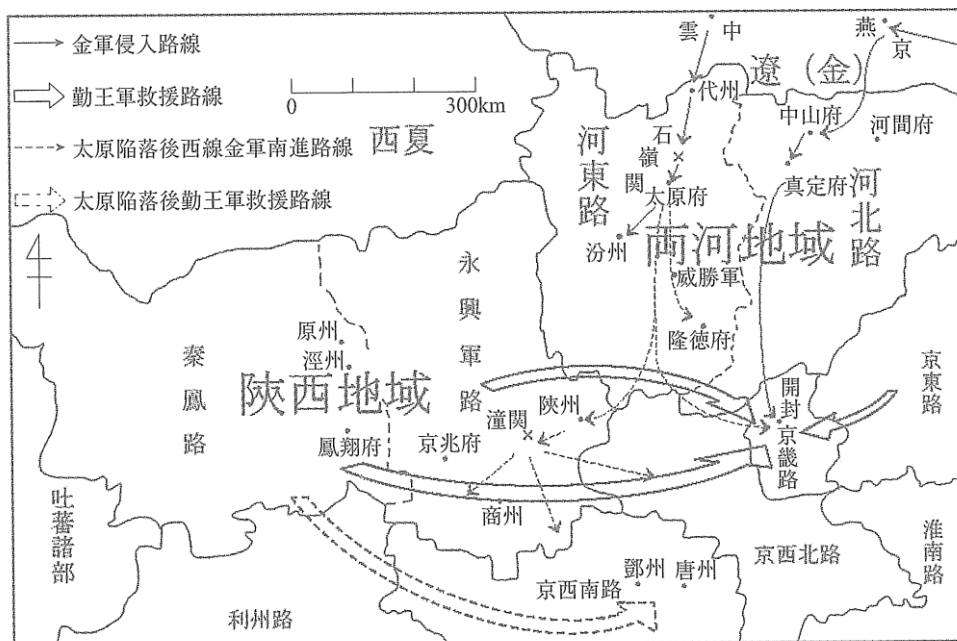
【地図 2】南宋期のユーラシア東方 [古松 2020, 164 頁]



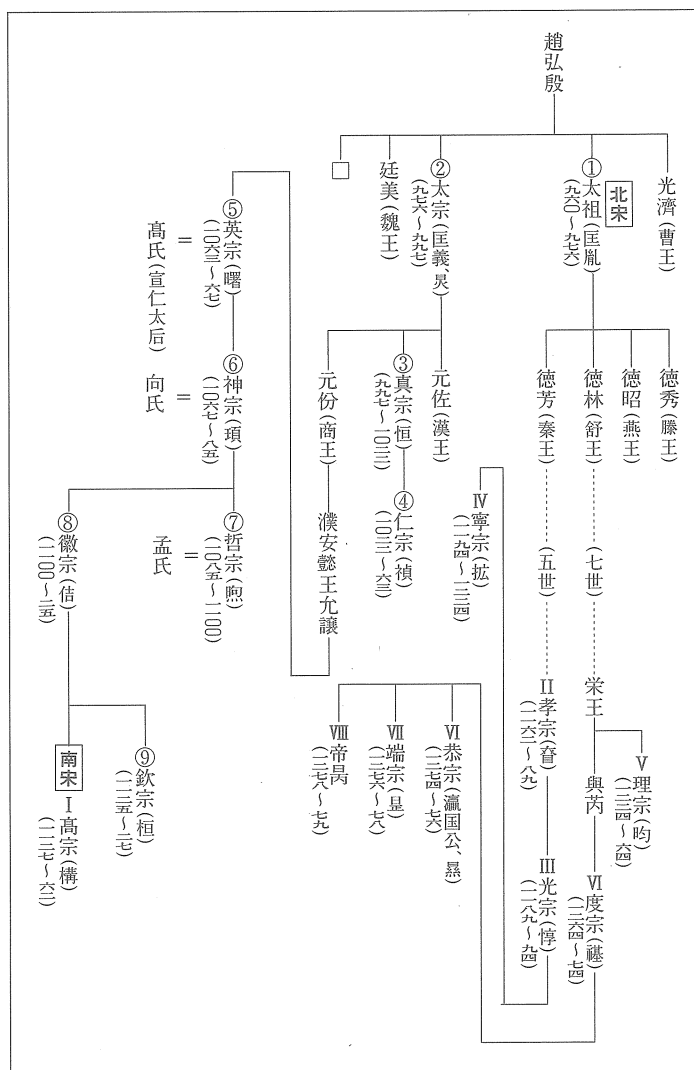
【地図 3】北宋後期の陝西地域（『中国歴史地図集 第6冊 宋・遼・金時期』を基に作成）



【地図 4】西夏の領域と宋の西北地域〔古松 2020, 125 頁に一部加筆〕

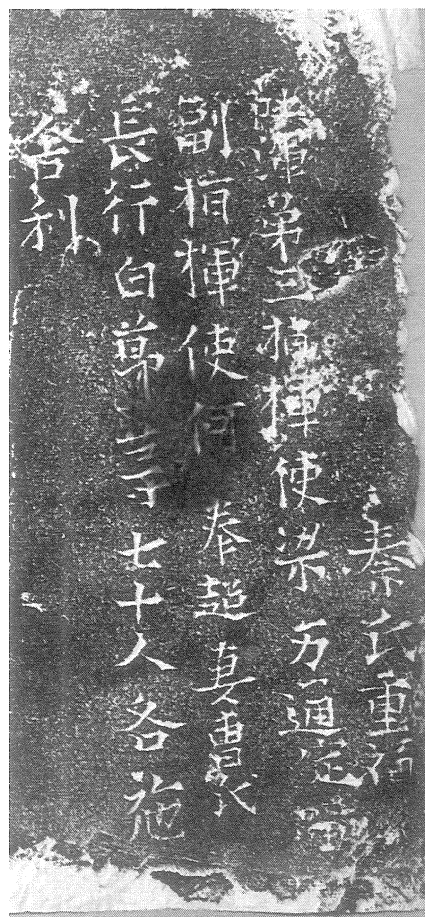
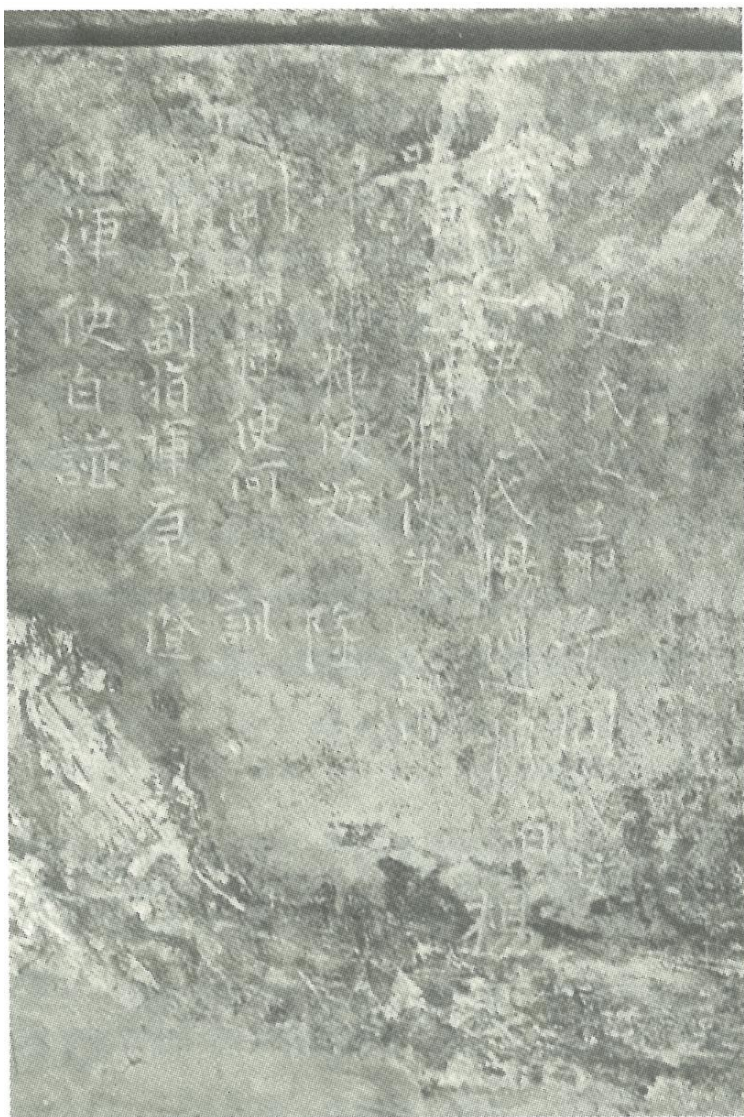


【地図 5】  
南伐時の宋・金  
両軍の動き  
[鄒 2019, 20 頁]



【北宋・南宋の系図】

【資料 1】定州博物館所藏宋代石函 [左：森部 2010，217 頁／右：村井 2018，22 頁]



左

史氏女弟子回我女

僕遵妻□氏楊遵楊□楊□

吐渾□□指揮使米海山

第□指揮使安隆

副指揮使何訓

第五副指揮康澄

吐渾使白譜

右

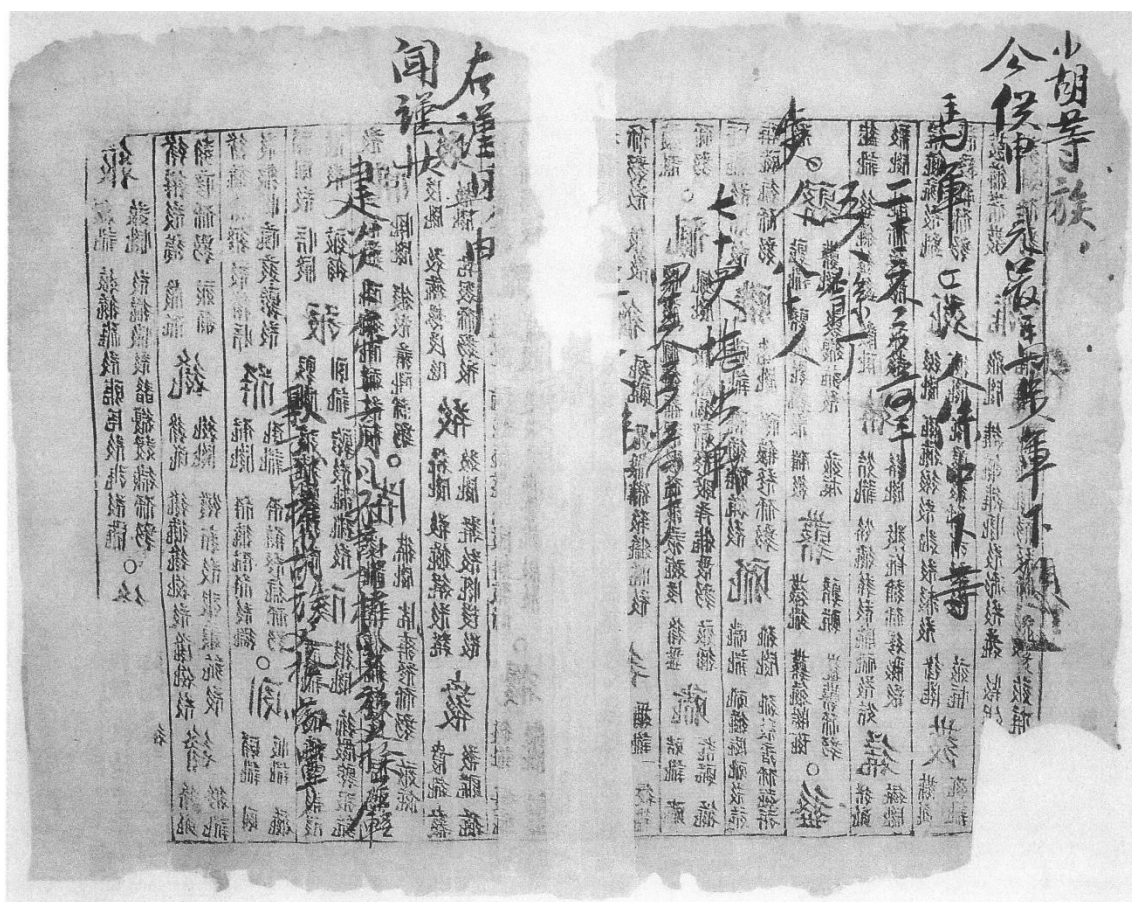
秦氏重福

2 吐渾第三指揮使梁萬通定留

3 副指揮使何奉超妻曹氏

4 長行白節等七十人各施

5  
舍利



|    |                                      |  |
|----|--------------------------------------|--|
| 1  | 小胡等族                                 |  |
| 2  | 今供申見管馬歩軍下項                           |  |
| 3  | 馬軍二十八人，係中下等                          |  |
| 4  | 二十三人弓箭手，                             |  |
| 5  | 五人餘丁。                                |  |
| 6  | 歩人八十人，                               |  |
| 7  | 七十四堪出戰，                              |  |
| 8  | 四十二人弓箭手，                             |  |
| 9  | 三十二人餘丁。                              |  |
| 10 | 「中欠」                                 |  |
| 11 | 右，謹具申                                |  |
| 12 | 聞，謹狀。                                |  |
| 13 | 建炎二年十二月 日承節郎權乱名族火II屈輕<br>敦武郎權小胡族火檢満寧 |  |

(訳)

小胡族など「について」

現在統轄している馬軍・歩軍について以下の通り報告いたします。

馬軍は二十八人，いづれも中等・下等で，二十三人は弓箭手，五人は「部隊編制されていない」余丁。

歩軍は八十人，七十四人は出撃することができ，「うち」四十二人は弓箭手，三十二人は余丁。

「中欠」

右のことについて，謹んで詳細にご報告いたします。謹状。

建炎二年十二月 日承節郎・権乱名族火II屈輕  
敦武郎・権小胡族火檢満寧

【資料 3】何家城石窟題記（拓影）〔いずれも『陝西石窟内容綜録』延安卷，中，505 頁〕



图10-28-12 石窟前廊北宋紹聖二年題記

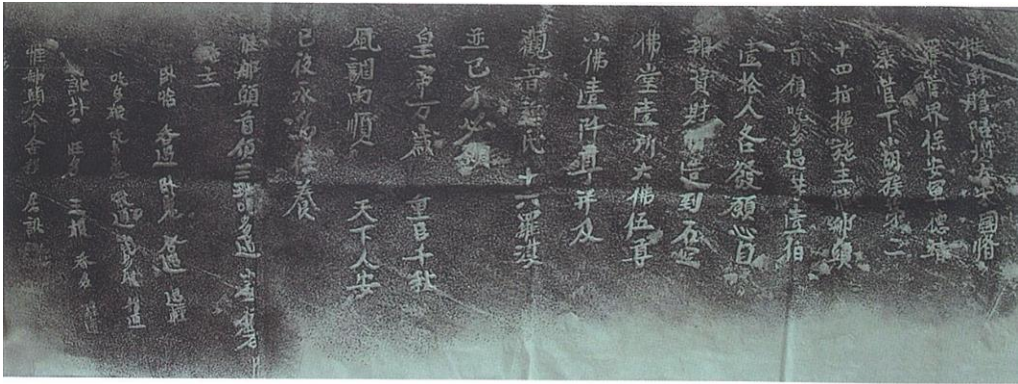
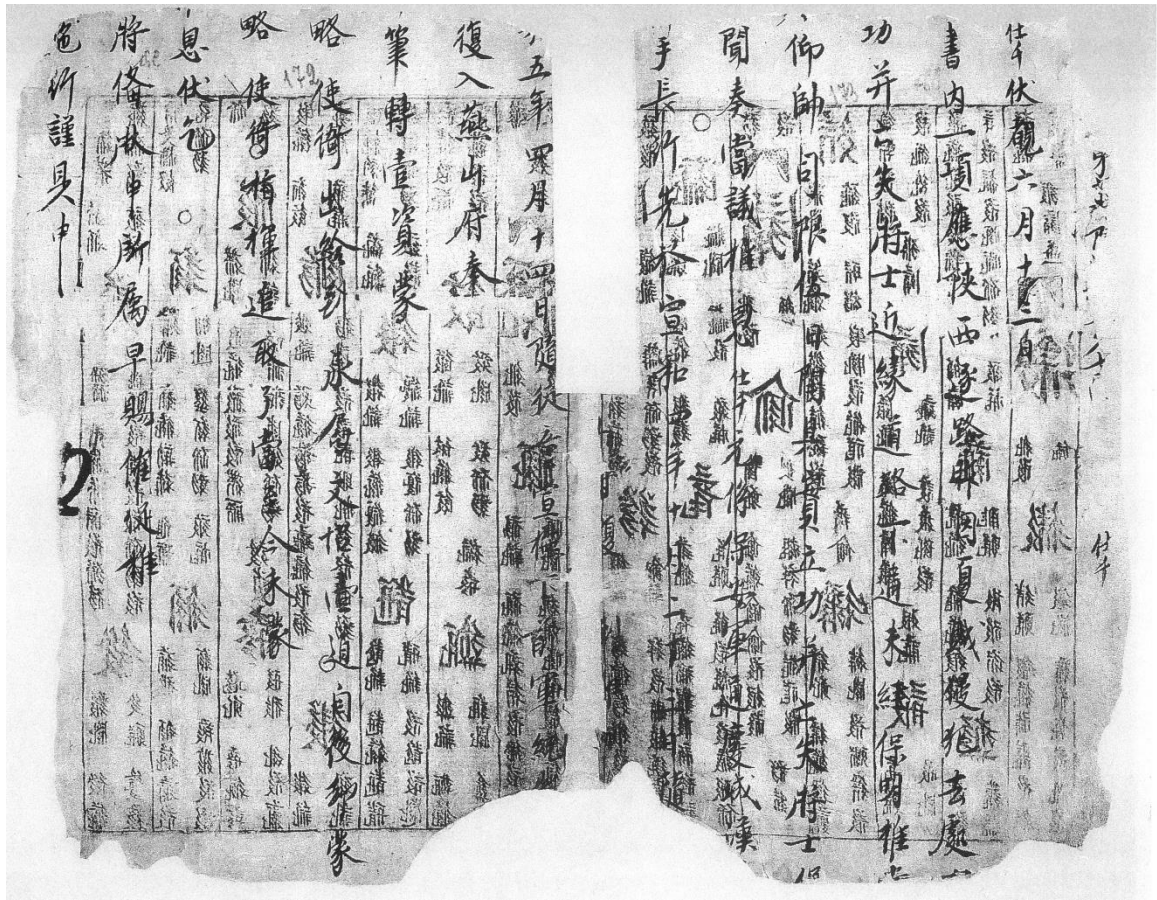


图10-28-11 石窟前廊吃多遇等開窟題記

|       |         |          |         |        |         |         |       |           |         |    |       |
|-------|---------|----------|---------|--------|---------|---------|-------|-----------|---------|----|-------|
| 12    | 11      | 10       | 9       | 8      | 7       | 6       | 5     | 4         | 3       | 2  | 1     |
| 本族巡檢胡 | 八日維那吃多遇 | 紹聖二年正月二十 | 壽，合家安樂。 | 財施主增福增 | 畢。自後，願捨 | 正月二十八日了 | 至紹聖二年 | 六月二十一日下手， | 佛堂自元祐八年 | 右已 | 地主吃多香 |

|       |    |                 |         |           |           |        |          |            |           |           |           |            |           |          |           |
|-------|----|-----------------|---------|-----------|-----------|--------|----------|------------|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|----------|-----------|
| 16    | 15 | 14              | 13      | 12        | 11        | 10     | 9        | 8          | 7         | 6         | 5         | 4          | 3         | 2        | 1         |
| ：（後略） | 施主 | 維那頭首領三口吃多遇山行行者。 | 已後永爲供養。 | 風調雨順 天下人安 | 皇帝萬歲 重臣千秋 | 並已了必願。 | 小佛壹阡尊，并及 | 佛堂壹所，大佛伍尊， | 捐資財，修造到石空 | 壹拾人各發願心，自 | 首領吃多遇等，壹佰 | 十四指揮，施主維那頭 | 寨管下，小胡族第二 | 羅管界保安軍德靖 | 惟南瞻部洲大宋國修 |



- | 16                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|----|----|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第七將隊 第七副 仕千                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |    |    |    |    |    |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| <p>□，仕千伏観睹六月十三日</p> <p>□書内一項，應陝西逐路，昨因夏賊侵犯去處，</p> <p>□功并亡失將士，近縁道路不通，未經保明推□。</p> <p>□仰帥司限伍日，開具實立功并亡失將士保</p> <p>□聞奏，當議推恩。仕千元保安軍通慶城漢</p> <p>□手長行，先於宣和四年十月二十三日隨□</p> <p>□五年四月十四日，隨從童宣撫下前軍統制□</p> <p>□，復入燕山府，奉</p> <p>□筆轉壹資。蒙</p> <p>□略使衙出給到承局文帖壹道。自後却蒙</p> <p>□略使衙指揮追取了當，至今未蒙</p> <p>□恩。伏乞</p> <p>□將備狀申所屬，早賜催促推</p> <p>□施行。謹具申</p> |    |    |    |    |    |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| <p>「後 欠」</p> <p>（訳） 6、14 行目</p> <p>私仕千はもともと保安軍通慶城の漢弓箭手長行であり、以前に宣和四年十月二十三日に「」に随つて「燕山府に」しました。「その後」宣和五年四月十四日には童宣撫（童貫）の管轄下にある前軍統制楊可世の軍団に随い、再び燕山府に入城し、「皇帝直筆の」御筆を奉じて一階級昇進ということになり、経略安撫使司が発給し終わった承局「に任ずるといふ」文書一通を受け取りました。しかしそれ以後に経略安撫使司の命令によって拘束され、今まで推恩を受けておりません。</p>                                                               |    |    |    |    |    |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |



## 「女真」の形成——東北アジア諸集団の興亡

井黒 忍

### 1. 女真と金

女真（ジュシェン〜ジュルチン、女直）とは、東北アジアの松花江・牡丹江・黒竜江下流域・沿海地方に住んだツングース系の集団。<sup>しゅうくしん</sup>肅慎・<sup>ゆうろう</sup>挹婁・<sup>もつきつ</sup>勿吉・<sup>まつかつ</sup>靺鞨・女真・満洲など。

1115年に生女真（後述）の<sup>アルチュウ</sup>安出虎水完顔部を率いる完顔阿骨打（太祖）が皇帝に即位し、金（大女真金国）を建国。跡を継いだ弟の呉乞買（太宗）のもと1125年に遼（契丹）を滅ぼし、1127年には宋を廃国。その後およそ100年の間、マンチュリアから華北に至る領域を支配したが、1234年にモンゴル・南宋の攻撃により滅亡。

1616年にヌルハチは女真を統合し、金（アイシン・グルン、後金）を建国。子のホンタイジは1635年に女真から<sup>マンジュ</sup>満洲へと改称し、翌年には国号を金から清（大清グルン）に変更。

明代の女真は現在の東北地方からアムール地方、沿海州一帯に散居したツングース系の言語を話す多様な人々の総称であり（佐々木1996）、満洲は女真集団を吸収・統合する中で政治的に作り出された存在である（杉山2011）。

★女真や満洲という「民族」が先天的に存在したのではない。では、金代以前の女真とはいかなる存在であったのか？いかにしてツングース系を代表する「女真」となったのか？

★これまで生女真完顔部の視点から捉えられてきた金の歴史を異なる視点から見つめ直す。

#### 1. 1. 他者が伝えた女真の姿：『三朝北盟会編』が語る女真の系譜とその分類

ルーツ：①高句麗朱蒙の遺種，②黒水靺鞨の種，③渤海の別族，④三韓の辰韓（→新羅）。

居住地：松花江の東，長白山中の鴨緑江の源流域。東は海，南は高麗，西は渤海や鉄嶺<sup>てつり</sup>，北は室韋<sup>しつゐ</sup>に接する。

分類：①合蘇款<sup>ハスハン</sup>（曷蘇館<sup>ハスハン</sup>，熟女真）：耶律阿保機（遼の太祖）が女真の勢力を削ぐため，有力者数千戸を遼陽の南に遷徙させて戸籍に登録。生女真との接触を禁じられる。満州語で曷蘇館の語義は「藩籬，柵」。対女真および対高麗のみならず，対西夏の前線にも「曷蘇館」が置かれる（李・周2010）。

②非熟女真，非生女真（→回伯<sup>フイハク</sup>）：遼河平原の東のへりに設けられた契丹と女真の居住地を分ける界壕から松花江までの間に居住。他の女真集団との通交を許可される。

③生女真：松花江の東にあって城郭内ではなく山間に散居。戸口の総数は十数万。推戴され

た酋長が千戸から数千戸にのぼる大小の集団を束ねる。

④**東海女真**：最も僻遠の東海の沿岸に居住する者たち。

⑤**黄頭女真**：頭髮が黄色で瞳が緑がかかるといった身体的特徴を持つ者たち。

このほかに「三十部女真」や「南・北女真」,「東・西女真」の区別あり。

## 1.2. 生女真完顔部の自らが綴る歴史：『金史』巻1・「世紀」

『金史』冒頭の「世紀」には、金の建国者である完顔阿骨打に至る10人の生女真安出虎水完顔部の族長の事績が記される。金の建国初期、遼東平定の直後に女真の古老らからの聞き取りが文字記録としてまとめられた。「世紀」冒頭の始祖三兄弟別離の伝説とともに「女真」集団を一つにまとめ上げるための政治的要請に由来するもの（古松2003）。

金は靺鞨に由来。靺鞨はもとは勿吉。勿吉七部が靺鞨七部となり、そのうちの粟末靺鞨が渤海に、黒水靺鞨が女真となる。金建国後には遼東の渤海人に対して、「女直、渤海は本と一家を同じうす」と完顔部への帰属を呼びかける。

金の始祖である函普<sup>フンフ</sup>は60才を過ぎて高麗からやって来て、僕幹水（詳細は不明。図們江、あるいは牡丹江の流域に比定）の完顔部の部落に寄住。

始祖函普は異邦人。ツングース系の特徴として始祖の亡人伝説（扶余・滅・高句麗）。多くは北から南への遷住であり、金の南から北への遷住は異質（三田村1949）。**絶えざる移動**こそがツングースの属性（シロコゴロフ1941）。

僕幹水完顔部と他集団との間で起こった殺人をきっかけとする諍いを調停したことにより、部人の信頼を勝ち取った始祖函普は、60才を過ぎた完顔部の賢女（おそらくはシャーマン）を娶る。婚姻によって妻（の家）の財産を承継し、二男一女をなした後、完顔部の一員（部人）となる。

兄の阿古廼<sup>アグナ</sup>は仏教を信じ、高麗に留まる。曷蘇館女真の胡十門<sup>フシモン</sup>は阿古廼の子孫。弟の保活里<sup>ホツリ</sup>は兄の函普と行動を共にしたが、分かれて耶懶の地に居住。石土門<sup>シトツメン</sup>と迪古乃<sup>ディグナイ</sup>（完顔忠）は保活里の子孫。

ツングースの習慣は**族外婚**。函普（始祖）が生女真完顔部とはルーツを異にする存在であったことを自らが語る。なお、燕城（中都）の西に立てられた太祖完顔阿骨打の功績を顕彰する「神功聖德碑」にも金の帝室が高麗に出自すると記された（文惟簡『虜庭事实』）。

ともに靺鞨に由来する女真と**渤海**。三祖伝説に基づく耶懶完顔部（保活里の後裔⇒**東海女真**）と**曷蘇館女真**（阿古廼の後裔）との関係。さらに、隠された主役とも言うべき**非女真系の集団**の役割。

## 2. 耶懶完顔部の軌跡

**耶懶完顔部**<sup>ヤラン</sup>とは、日本海に流れ込む耶懶水（蘇城河、パルチザンスカヤ川）流域に拠った女真集団。安出虎水完顔部の始祖函普の弟である保活里の子孫を名乗る。金の建国や遼の討滅に大きな役割を果たす。『三朝北盟会編』（巻3）の「東海女真」や「東瀕西渤海（東の瀕海、西の渤海）部族」に相当すると考えられる。耶懶は日本海沿岸・朝鮮半島東北部・黒竜江流域の間の交通の要地。

直离海<sup>ジリヘイ</sup>（耶懶完顔部部長、保活里4世の子孫）は、これまで疎遠であった安出虎水完顔部への帰属を求め、烏古迺<sup>ウグナイ</sup>（景祖）のもとへ使節を派遣。阿骨打（太祖）は石土門・迪古乃（完顔忠）兄弟と親密な関係を構築。

建国後の1124年には耶懶完顔部に蘇濱水流域への移住が命じられる。蘇濱水（綏芬河、ラズドリナヤ川）流域の中心地は現在のウスリースクに当たる双城子。当地は渤海時代から「率賓の馬」と称される良馬の産地としても有名。**迪古乃（完顔忠）の神道碑**の碑額がウスリースクにて発見。「**耶懶猛安之印**」（天泰七年〔金末に遼陽に自立した蒲鮮万奴の用いた年号〕の紀年）がウスリースク近辺のクラスノヤロフスコエ古城にて発見。

### 2.1. 女真の海事能力

高麗から東女真と呼ばれた集団は、東北方面よりしばしば高麗を襲撃。100艘にもおよぶ船団を率いて臨海部を攻撃（『高麗史』）。1019年の刀伊の入寇（壱岐・対馬・北九州）。20m前後の船20～40艘、1艘につき50～60人の乗員。400～500人が捕虜となる（藤田2007）

パルチザンスカヤ川流域のシャイガ山城から出土した**銀牌**（女真文字「国の信（誠、真）」）と『吾妻鏡』所載の銀牌の文字との近似性。1223年の越後国寺泊浦への「高麗人」漂着が女真船であった可能性（川崎2002）。

沿海州から日本海を越えるルート。クラスキノ古城の発掘の進展により、ポシェット湾を形成する半島群や沖合の島にも渤海時代と考えられる遺跡や城跡・土塁が確認。日本道の整備と関連する**港湾施設群の整備**が進められたことが確認（小嶋2021）。渤海時代から引き続き、金代においても沿海地方に暮らした東海女真が高い海事技術を維持していた可能性。

### 2.2. 「南船北馬」とのギャップ：宋と高麗の資料が伝える女真の水軍

南宋の楊応誠は大金高麗国信使として金に拉致された徽宗と欽宗の返還を求めるため、仲介を求めて高麗に向かう。ただし、すでに金への臣属姿勢を明確化していた高麗にとって、自国を仲介とする宋と金との通交には明らかな危険が予想され、婉曲にその提案を拒否。高麗を海路襲撃した東女真の伝統を継承する金の水軍の強力さと両浙（浙東・浙西）攻

撃を意図した造船作業が進行中であるとの情報を伝える。また、女真の国の東は大海に面しているため水戦を得意とすること、さらに金が返礼を名目として使節を派遣し中国東南沿海部の地形を探り、戦艦を派遣して攻撃をしかける可能性を指摘（熊克『中興小紀』巻3および『高麗史』巻15）。

### 3. 曷蘇館女真と渤海人の役割

曷蘇館女真は女真語のみならず、漢字・漢語や契丹語・契丹文字に通じた高次の文化レベル。渤海人も同様。遼・宋・高麗との通交の窓口。曷蘇館女真の胡十門<sup>フシメシ</sup>は、遼陽において自立した渤海人の高永昌の呼びかけを拒否。阿骨打の呼びかけに応じ、阿古廼<sup>アグナイ</sup>の子孫を名乗って帰属。渤海の再興ではなく、女真の国家建設を選択。同じく曷蘇館女真の合住も始祖の兄の子孫を名乗るが、胡十門との関係は不明（『金史』巻66）。

#### 3.1. 遼東と遼陽

異なる生業地域や文化圏の接点としての遼東地域の重要性（鴛淵 1940）。西は遼西を経て北京に至り、北は遼河水系（遼上京）および松花江水系（金上京）、東南は鴨緑江水系（高麗方面）をむすぶ陸上ルート上の要衝であり、山東半島と遼東半島を結ぶ海上ルートを扼する位置にある。926年の渤海滅亡の後、さらに東丹国が遼陽に遷都する際に渤海人を遼東・遼西に徙民。遼陽の戦略的重要性。

1029年に渤海人の大延琳が遼陽にて自立。興遼国を建国。

1116年に渤海人の高永昌が遼陽にて自立。大元国を建国。

1161年、烏祿<sup>ウル</sup>（世宗）が遼陽にてクーデタを起こし即位。

1215年、蒲鮮万奴が遼陽にて自立。大真国を建国。

#### 3.2. 多様な集団・人士が混在する空間としての遼東

遼によって捕らえられた異国人が遷徙され雑居。渤海人や鉄离・吐<sup>ト</sup>（谷）渾・高麗・靺鞨・女真・室韋・烏舎<sup>ウジェ</sup>・契丹・回紇<sup>ウイグル</sup>・党項<sup>タングート</sup>・奚<sup>ケイ</sup>などの人々が含まれ、それぞれの言語が通じなかったため互いに漢語にて意志疎通（『宣和乙巳奉使金国行程録』第33程）。

楊朴は遼東鉄州の人。渤海の大族とする資料（『契丹国志』巻10）もあり。高永昌の自立に際して金に帰属。謀臣として阿骨打に仕え、皇帝への即位と金の建国を進言。また、阿骨打の「大聖大明皇帝」への冊封を遼に要求するなど（『三朝北盟会編』巻3）、国家の建設に多大な貢献を果たすが、『金史』にはほとんど記録なし。国作りのプランナー、アドバイザーとしての曷蘇館女真や渤海人など遼東人士。

#### 4. 非女真の存在

安出虎水完顔部の勃興の要因は鉄資源および製鉄技術の確保。当初、完顔部は鉄製武具を「隣国」(＝胡里改<sup>フリカイ</sup>)から購入。胡里改とは「宮殿の民」を意味し、渤海の伝統を継承する集団。渤海の「旧国」とされる敦化盆地や上京龍泉府が置かれた寧安盆地を拠点として、鉄の鍛造および鉄甲(鉄製小札)の製造・販売を独占的に行う職能集団。渤海や五国・鉄离・兀惹<sup>ウジエ</sup>・達魯古<sup>ダルク</sup>らと並ぶツングース系の**非女真集団**(簗島 2001, 臼杵 2006)。

胡里改<sup>フリカイ</sup>の温都部<sup>おんと</sup>を率いる烏春(ウチュン～ウクシン、女真語で「甲」)は、完顔部の世祖(阿骨打の父)からの通婚の申し出に対して、“犬や豚の子と一緒にどうして我が子が育とうか。胡里改と女真が身内になれるはずもない”と答えてこれを拒否(『金史』巻 67)。「甲士」を率いて完顔部を攻撃。

##### 4.1. ライヴァル列伝としての『金史』巻 67

『金史』巻 67 は烏春を含め、金の建国前に安出虎水完顔部に敵対した集団とその族長の記録をまとめた特異な章。図們江流域や牡丹江流域など、渤海時代からの文化的先進地域を拠点とする集団と黒竜江北岸に居住した素朴な力を保持する集団の間で結ばれた南北同盟により安出虎水完顔部は窮地に立たされる。

牡丹江を経由して、黒竜江流域と図們江流域を結ぶルートとウスリー江を経由して黒竜江流域と日本海沿岸、さらに朝鮮半島北東部を結ぶルート(中澤 2012)。渤海以来の伝統と技術に基づく文化的先進性。河川の合流地や規模の大きな**盆地**など、戦略的な要地を拠点とする。東北アジアにおける盆地の意義。**沮洳地・森林**の広がりや平原部の防衛力の低さ。

安出虎水完顔部の強みは後ろ盾とした遼(契丹)の権威と軍事力。流通・交易・交流の面において遼とツングース系諸集団との間に介在。

##### 4.2. ツングース系諸集団の統合

金の建国と東北アジアの制覇は、耶懶完顔部や曷蘇館女真ら女真集団の統合のみならず、胡里改や渤海など非女真集団の吸収・併合を通じたツングース系諸集団の統合を意味する。

建国後には旧五国の地(中心は牡丹江と黒竜江に合流地)に行政区画としての胡里改路が設置。胡里改の遷徙が行われた可能性。海陵王(第 4 代皇帝)の南征時における契丹人耶律窩斡<sup>ヤリツカアツ</sup>の反乱に前胡里改路節度使<sup>じゅうおん</sup>の什温が参加。世宗(第 5 代皇帝)の時代には上京の防衛のために胡里改を遷徙。

章宗(第 6 代皇帝)の即位後に娘が後宮に迎えられたことにより、父である胡里改の夾谷清臣<sup>きやうこくせいしん</sup>は「**本朝人**」すなわち女真人と同じ扱いを受けることとなり、同時にその「族」

も国人（女真人）としての待遇を得る。

ここに女真と胡里改の融合、より正確には胡里改の女真への同化になる。これは新たな女真の形成を意味する。曷蘇館女真の語も章宗の時期を最後に見えなくなる（李・周 2010）。渤海については、元代の『南村輟耕録』にも「漢人八種」のうちに契丹や高麗、女直らと並んで「渤海」の名が見えるが、「女直と同じ」との注記あり（中村 2019）。

#### 4.3. 女真から満洲へ

金末における胡里改（路）の存在を示すものに、黒竜江省鶏東県で発見された「**胡里改路之印**」（貞祐二年の紀年）がある。金滅亡の後、モンゴル時代には松花江流域から黒竜江中・下流域に桃温・胡里改・斡朵憐・脱斡憐・孛苦江の五つの軍民万戸府が設置。元末明初の兀者の南下に押されて五万戸府は解体。イラン・トゥメン（三つの万戸）と呼ばれた桃温・胡里改・斡朵憐の内、胡里改と斡朵憐は松花江上流域や図們江流域へと移動。

明代には胡里改万戸のアガチュを始祖とする建州衛、斡朵憐万戸の童モンケテムルの建州右衛とその弟のファンチャの建州左衛からなる建州三衛が成立。建州衛の首長は金の宗室の出を名乗り、建州左衛の斡朵憐は「**大金の支裔**」であるとする伝承あり。また、モンケテムルの姓である「童」は、金代の夾谷姓に由来し、後にギョロ姓に繋がる。

建州三衛は 15 世紀半ば以降、建州衛を盟主「金皇帝」とし、左右衛が連合する連合体を形成し、これを「**大金**」と称した（河内 1994）。建州三衛の後身であるマンジュ五部を統合したヌルハチはアイシン・ギョロ姓を名乗り、金（後金）を建国。

#### 5. まとめ

★生女真安出虎水完顔部は後発の集団。遼と東北アジアをつなぎ、その権威と武力の傘のもとに以下の三集団を吸収・併合して覇権を確立。

①海事能力に長け、黒竜江・ウスリー江・図們江・朝鮮半島西北部、さらには日本海を越える交通・交易の要地である沿海地方に拠った耶懶完顔部。

②文化的水準が高く、遼・宋・高麗と東北アジアをつなぐ遼東の地に拠った曷蘇館女真や渤海人など遼東人士。

③渤海以来の文化的先進地域である牡丹江・図們江流域に拠り、製鉄や武具製造・販売など伝統・技術を継承する胡里改ら非女真集団。

★非女真集団である胡里改は金の建国の支配のもとで女真へと同化。金代中期頃には、非女真集団を吸収・同化した新たな「女真」の観念が出現。末期には金帝室の系譜にすらも不備や脱漏が生じるなど、女真のルーツや系統に関する意識の低下。金の滅亡後には、東北アジ

アの地にあった胡里改ら旧非女真系集団が女真の正統と位置づけられ、金と後金、女真と満洲をつなぐ存在となる。

#### 参考文献

- 井黒 忍 2008「官印資料に見る金代北東アジアの「周辺」—“南船北馬”と女真の水軍」、『北東アジアの中世考古学』アジア遊学 107, 勉誠出版
- 井黒 忍 2009「耶懶完顔部の軌跡—大女真金国から大真国へと至る沿海地方—女真集団の歩み」, 天野哲也ほか編『中世東アジアの周縁世界』同成社
- 井黒 忍 2019「女真と胡里改—鉄加工技術に見る完顔部と非女真系集団との関係」, 古松崇志ほか編『金・女真の歴史とユーラシア東方』アジア遊学 233, 勉誠出版
- 臼杵 勲 2006「北東アジアの中世—靺鞨・女真の考古学」, 天野哲也ほか編『北方世界の交流と変容：中世の北東アジアと日本列島』山川出版社
- 鴛淵 一 1940『奉天と遼陽』富山房
- 川崎 保 2002「『吾妻鏡』異国船寺泊浦漂着記事の考古学的考察」, 『信濃』第 54 巻第 9 号
- 河内良弘 1994「李滿住と大金」, 『松村潤先生古稀記念清代史論叢』汲古書院
- 小嶋芳孝 2021「渤海平地城とクラスキノ城跡：ポシエト湾周辺遺跡群の評価」, 清水信行・鈴木靖民編『渤海の古城と国際交流』勉誠出版
- 佐々木史郎 1996『北方から来た交易民：絹と毛皮とサンタン人』日本放送出版協会
- シロコゴロフ著；川久保悌郎・田中克己訳 1941『北方ツングースの社会構成』岩波書店
- 杉山清彦 2011「女直＝満洲人の「くに」と「世界」—マンチュリアからみた「民族的世界」の姿—」, 佐々木史郎・加藤雄三編『東アジアの民族的世界：境界地域における多文化的状況と相互認識』有志舎
- 中澤寛将 2012『北東アジア中世考古学の研究—靺鞨・渤海・女真—』六一書房
- 中村和之 2019「元・明時代の女真（直）とアムール河流域」, 古松崇志ほか編『金・女真の歴史とユーラシア東方』アジア遊学 233, 勉誠出版
- 藤田明良 2007「文献資料から見た日本海交流と女真」, 前川要編『北東アジア交流史研究』塙書房
- 古松崇志 2003「女真開国伝説の形成—『金史』世紀の研究」, 『論集「古典の世界像」』「古典学の再構築」総括班
- 三田村泰助 1949「朱蒙伝説とツングース文化の性格」, 『立命館文学』70～72
- 簗島栄紀 2001「渤海滅亡後の北東アジア諸民族と長距離交易」, 『古代国家と北方社会』吉川弘文館
- 李自然・周伝慧 2010「曷蘇館女真的幾個問題」, 『満族研究』第 4 期